
笛の音に誘われて

トモリ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

笛の音に誘われて

【Nコード】

N9673P

【作者名】

トモリ

【あらすじ】

“もう一人の自分”に怯える風沙。^{ナギサ}

そんなある日、彼女は不思議な笛の音色に助けられる。

呪われた笛に隠された、不思議で少し切ない物語。

1 “もう一人の自分”

私はあの時、悪魔と約束を交わした。

でも、後悔なんてしていない・・・だって、あの人と一緒にいられるから。

たとえ何を犠牲にしても、私は構わないと思った。ただ、願うことがある。

・・・どうか、あの人がもう一度、私に微笑みかけてくれますように。

私の中にもう一人の私がいる。

風沙ナギサがそう感じ始めたのはつい最近のことだ。感じ始めたのは最近だが、もう一人の自分、は前々から私の中に存在していたのかもしれない。

ただ自分が気付いていなかっただけ・・・その証拠に、今まで“もう一人の自分”は決して姿を現すことはなかった。しかし、最近もう一人の自分が私を支配するようになってから、私はその存在に気づくようになった。

私はそいつの事を恐れた。普段の自分ではいられなくなってしまうから。でもそいつは“普段の自分”ではないにしても、“本当の自分”かもしれない、と私は考えるようになってきた。
“本当の自分”を目の当たりにするのが怖いから、私はそいつを恐れているかもしれない。

「風沙、何見てんの？」

突然、後方から声をかけられた。反射的に振り返ると、そこには友人の美春^{ミハル}の姿があつた。

「・・・景色」

風沙はそっけなくそう答えると、再び窓の外に視線を移す。

「それは分かつてるって〜！」

美春は笑い混じりにそう言うのと、風沙と肩を並べ、同じく窓の外を見る。

「・・・海、綺麗だねえ」

美春はそう呟く。

「・・・うん」

風沙が見ていたもの―それは海だ。沈みかけた太陽の光を反射して、それはオレンジ色にキラキラと輝いている。

風沙はその眩しすぎる煌きに、思わず目を細めた。そしてそのキラキラが自分の重たい気持ちをも一緒に包んでくれればいいのに、そう思わずにはいられなかった。

「あ！風沙、そろそろ夕食だから食堂行かないと」

「うん」

風沙は窓から目を離さずに、それだけ答える。

「じゃ、私先に行ってるから早めにきてね。早くしないと皆食べ終わっちゃうから！あ。あと、部屋に鍵掛けるの忘れないでね！」

美春は早口でそう言うと、風沙に微笑みかけて部屋を後にした。

風沙はそんな美春を見送ると、溜息をつく。

風沙は自分でも思うが、かなりのマイペースな人間だ。美春もそれを分かっている、風沙に行動を合わせようとしなない。

でもそれが逆にありがたかった。他人に行動を合わせるのも、合わせてもらうのも風沙はあまり好きではない。他人に行動をいちいち合わせていたら疲れるし、合わせてもらうのも何だか悪いような気がするからだ。

「はー・・・」

風沙は再びため息をつく、一番近くにあったベッドに腰をおろす。十人部屋に今は風沙一人だけ。そして窓から目を離すと、仰向けに寝転がった。

（あー。早く家に帰りたい・・・）

今、風沙は合唱部の合宿にこの宿泊施設に来ている。しかもまだ一日目。

風沙ははっきり言って、合宿という行事が大嫌いだ。決められた時間どうりに集団行動。そこがマイペースの風沙にとって、苦痛以外のなにものでもない。

「ねー。風沙。そんなに嫌なら早く帰ろーよ。仮病でも使えば、簡単にこの場から逃げ出せるのに！」

ほら、まただ。もう一人の自分が私を支配しようとしている。

（嫌でも一応最後までやんないかね・・・皆にも悪いし）

風沙は心の中で自分にそう言い聞かせると、重い腰をベッドから上げた。そして鍵を掛けると、部屋をあとにした。

そしてその日の夜。

風沙は暗闇の中、眠れないでいた。しかし、眠れないでいるのは風沙だけではないらしい。その証拠に、周りからは他の皆のひそひ

そと話している声が聞こえてくる。

風紗は皆の話し声が消えないうちに早く寝たいと思った。ただでさえ自分は暗い所が苦手なのに、この暗闇の中自分だけ取り残されるのはごめんだ。

「風紗、起きてる？」

隣のベッドから声がかげられた。美春だ。

「うん。起きてる」

風紗は皆と同じように、ひそりと言葉を返す。

「風紗、私より早く寝ないでね！寂しいし！」

「さー。どうでしょう」

風紗はニヤリと笑いながらそう言う。暗闇のせいで、その笑みは美春には見えなかったと思うが。

「・・・よしっ！じゃあ私、風紗より早く寝るから邪魔しないでね！分かった？」

「はいはい」

風紗は適当に相槌を打つと、布団に顔をうずめる。私も早く寝たいのは同じだ。そして、次に目を開けるときは、部屋が明るくなっていることを願って瞼をとじた。

だが、その願いは叶わずに終わった。風紗が目を開けたとき、そこはまだひっそりとした闇に包まれていた。

皆の声も聞こえない。あたりは奇妙なくらいに静まりかえっている。

（早く起きすぎたかも・・・）

そして時間を確認しようと、枕元において置いた携帯電話に手を伸ばす。とその時、何か黒いものが視界に入った。

驚いてそちらに目を向けると、そこには一人の女の子が立っ

た。周りの暗闇より暗い、漆黒の長髪にそれと同じ色の大きくて丸い瞳。

そして彼女は風沙の視線をとらえると、にっこりと微笑んだ。

（・・・え？）

風沙は反射的に体を起こす。

そして次の瞬間、カーテン越しに光が差し込んだ。朝がきたのだ。女の子の姿はそれと同時に消えた。風沙は驚いてあたりをキョロキョロと見渡す。

（見間違い・・・？）

時間を確認すると、約五時。まだ起きるのには早い。

風沙は再び布団に潜り込む。それにしても、さっきの女の子は何だったのだろう。ただの幻だったのだろうか。

そして風沙は軽いため息をついた。だがそのため息は、あの女の子に対してのものではない。今日また、嫌な一日が始まる事に対してのため息だ。

（あー。今日が最終日だったらな）

そして風沙は再び目を閉じる。

「あー！いい事思いついた！ねえ、風沙。海行かない？海はきつと気持ちいいよ。それに運良く風邪を引いて、家に帰れるかも！」
「・・・」

風沙はできるだけ、その声に耳を貸さないように務めた。そうしないと、“普通の自分”が“本当の自分”になってしまいそうで怖かった。

「ねー？行かないの？残念だなあ・・・」

・・・確かに海には行きたい。きつと朝の海はとても綺麗で気持ちがいいだろう。もしかしたら、このモヤモヤした気持ちも少しは晴れるかもしれない。

それに風邪を引かなければいいだけの話だ。そうすれば皆に迷惑をかけることもない。

（・・・行くか）

凧沙はすばやくベッドから起き上がると、旅行用のバッグからカイデイガンを取り出して、それを羽織る。そして、皆に気づかれないうちに静かにドアを開けると、部屋をあとにした。

そしてやっと着いた。

今、凧沙の前に広がっている大海原は凧沙達が寝泊まりしている宿泊施設からすぐ近くのある場所にある。聞いた話では、その宿泊施設は海なし県に住む人々が海に触れ合う機会を増やすために、建てられたものらしい。

凧沙はその施設を建てた誰かに（海を見られたという点で）少しだけ感謝しながら、朝日に染まる海を眺めた。

聞こえるのは波が岸に打ち付けている音だけ。普段いつも耳にしている、当り前の音が何も聞こえない。

凧沙は背伸びをした。やっぱり思っていた通りだ。とても・・・気持ちいい。

どこまでも続く海の煌き。それは終わりの無いようにさえ思えた。そして自分が、ものすごくちっぽけな存在であることを改めて実感した。

突然、強い風が凧沙の頬を打つ。今は三月の下旬。朝と夕方はまだ寒さが残っている。

（そろそろ帰るか・・・）

凧沙は身震いすると、海に背を向ける。正直、ずっとここにいたい気分だったが、時間も無いし皆に迷惑がかかってしまう。凧沙は後ろ髪を引かれる思いで歩き出した。

「ねー。もうちょっとここにしようよ。時間なら少しぐらい遅れても大丈夫だってー！」

また“もう一人の自分”だ。今まではこんなに頻繁には出てこなかったのに。

「ねっ。ついでに海に入ってみない？冷たいかもしれないけど、膝くらいまで。それなら風邪を引く心配もないでしょー？」

「！！！！」

凧沙は驚きのあまり言葉を失った。今自分は、自分の意思に反して海へ向かって歩き出している。体が勝手に動く・・・怖い！

しかし不思議なことに、自分は何故か微笑んでいる。そしてついに足が海水に触れた。それは冷たいというより、凧沙には痛く感じられた。しかし自分はそれでも、それを楽しんでいるかのように微笑んでいる。

きつと周りから見れば自分は、海水に足を入れて楽しんでいる少女にしか見えないだろう。凧沙はそう思った。

そう思っている間にも、凧沙の足は止まらない。どんどん海の奥へと進んでいく。まるで、海の痛みに似た冷たさを楽しむかのようにゆっくりと。

（ヤバ・・・）

すでに海水は膝以上に達していた。これ以上進むと、全身が海水に浸ってしまうかもしれない。いまだに体は言うことを聞く気配さえなく、それでも自分は歩みを止めようとしない。

凧沙は恐怖でいっぱいになった。このまだと・・・海の中に完全につかってしまう。

その時、波の音以外の何か別の音がかすかに聞こえた。凧沙はとっさにその音を聞き取ろうとする。

よく聞くと、それは笛の音だった。その音は、とても優しいメロディーを奏でていて、それは凧沙の全身を包み込む。

「・・・！！」

そして次の瞬間、体が自由になった。やっと普段の自分が戻ってきたのだ。

凧沙は高鳴っている心臓を押さえながら、ゆっくりと周りを見渡す。笛の音はいつの間にかやんでいた。いったい誰が吹いていたのだろう。見る限り、自分以外に人はいない。

(・・・さむつ)

自分の下半身が、海水に浸かってしまっている事を忘れていた。このままでは本当に風邪を引いてしまう。そして海から逃げるようにして砂浜まで戻った。

「風沙!!」

部屋に戻ると、美春が慌てた様子で駆け寄ってきた。

「あの事聞いた？」

「・・・あの事って？」

「なんか、この近くでの工場で事故があったらしくて、今すぐ帰らないといけないんだって」

「!!」

風沙は自分の耳を疑った。・・・今すぐ帰れる？これ以上うれしいことがあるだろうか。“今日が最終日だったらしいのに”という風沙の願いは叶ってしまったのだ。

「だから風沙も早く荷物まとめて帰る支度してね！」

「うん」

よく見ると、皆ほぼ荷物をまとめ終わっている。そして部屋の中はいつもより騒がしい。どうやら今すぐ帰れるという事は本当のようだ。

風沙の顔に自然と笑みが浮かぶ。そして荷物をまとめにかかった。

そして合宿が終わった次の日。

風沙は見事に風邪を引いた。昨日家に帰ってきて、妙にだるいと思っただけの日にはこれだ。

今更だが、少しでも風邪を引きたいと思った自分が馬鹿らしく思えてくる。そして改めて健康へのありがたみをしみじみと感じた。

風沙はベッドの中で寝返りをうつと、天井をじっと見つめる。

今年の合宿は妙に運が良かったような気がする。早く帰りたいと思ったら、事故が起きて早く帰れたし、風邪を引きたいと思ったら実際に引いた。そのすべてが不思議なことに、偶然に起こったのだ。

そして・・・夜に現れた謎の女の子。彼女はただの見間違いだったのだろうか。それとも・・・。

そして忘れてならないのはあの笛の音。その綺麗なメロディーはまだ風沙の頭の中にしっかりと残っている。

よく考えれば、あの笛の音も謎だらけだ。ただ分かっていることは、その笛の音が風沙を“もう一人の自分”から助けてくれたということ。

・・・いったい何だったのだろう。今年の合宿は何か、が変だ。風沙はそれらの考えを頭の隅に追いやると、再び寝返りをうつ。

部活の合宿のせいで忘れかけていたが、今は春休み中。当たり前だが、学校はない。しかし風沙達合唱部にとっては、ぜっこの練習時間だ。その為、毎日といっていいほど部活はある。

しかし、今日は昨日の事件のせいもあり特別に休みになったらしい。

風沙はこの休みに感謝する反面、合宿で起こった事について悩まされながら一日を過ごすことになりそうだと思った。

そして次の日。

風沙は朝の通学路を一人黙々と歩いていた。風邪はもうずいぶんと良くなっただけ。そして今日から部活動が再開される。

風沙の学校は、歩いて二十分の比較的近い場所にある。そして自

宅の前にある丘の上の道にそって、凧沙は通学しているのだ。そしてしばらく歩くと、遠くの方に住宅街に挟まれた学校が見えてきた。そして丘を挟んで反対側には、野球をするためのグラウンドや、雑木林が広がっている。今朝は早いせいか、人はあまり見当たらなかった。

けれど、凧沙はこんな朝の時間が大好きだ。朝のすこしひんやりとした空気も、時々頬をなでる風も、どこまでも続く青空も、それらは凧沙の硬くなった心を柔らかくしてくれる、そんな気がするからだ。

そして凧沙はあつという間に学校の前までたどり着いた。ちなみにこの学校は県立の共学。といっても、なぜか男子より女子の割合が多く、そのせいか凧沙の所属している合唱部も男子は一人もいない。しかしそれは男子が苦手な凧沙にとっては好都合な事だ。

（もう着いちゃった）

これで朝の散歩タイムはもう終わり。あとは長い部活の時間が始まるだけだ。

「――」

その時、聞き覚えのある音色が聞こえてきた。あの時の笛の音だ。（小さくてよく聞こえない・・・！）

凧沙は反射的に音のする方へ走りだしていた。・・・自分でも驚くくらいに、この音を聞きたくてたまらなくなっていたのだ。

凧沙が歩みを止めると、その場所から少し離れた土手の下の方に一人の青年が座っていた。学校からずいぶん離れた場所まで来てしまったが、凧沙にとってそれは全然気にならなかった。

むしろ、笛を吹いている青年のことが気になって、凧沙は彼をよく見るために目を細める。

彼の吹いている銀色の横笛からは、あの不思議なメロディーが流

れ出ていた。その曲は風沙の知らない曲だ。しかし、何となくだが、それは外国の曲のような雰囲気を持っているように感じた。

その青年の顔はここからだ確認することはできない。その時、風が彼の茶色の髪を揺らした。その風に乗ってメロディーも聞こえてくるようだ。風沙は何となくだが、この人はとても奇麗な人なのだろうと思った。

（あ・・・部活・・・）

部活の事をすっかり忘れていることに気づいた。今からでも間に合うだろうか。風沙は彼のメロディーをずっと聞いていたい気分だったが、彼に背を向けると、もと来た道へ歩き出した。

（あの人に聞かれてるの見つかったら恥ずかしいし・・・）

「おい！！その人ー！！」

後ろから声をかけられた・・・ような気がした。風沙はドキリとして一瞬、歩くのを止めようと思ったが、かまわず歩き続ける。きつとさっきのは違う誰かを呼んだのだろう、そう思うことにした。

第一ここは学校からも離れていて、家も反対の方向にある。風沙に声を掛けてくれる人はいるはずがない。

「無視すんなよー。制服を着た人ー！！」

風沙は驚いて肩越しに振り返った。制服を着た人・・・間違いないそれは自分の事だ。

いつの間にかその青年は風沙の後方に立っており、目が合うとニヤリと奇妙な笑みを浮かべる。

「どーも！」

「・・・」

風沙は内心で少し戸惑いながら、黙って彼の右手に視線を移す。そこにはあの銀色の横笛が握りしめられていた。そしてよく見るとその笛は所々に傷や錆がついており、とても古いものであるように感じた。

「俺の笛の音聞こえた？」

彼はそう言いながら、ジーンズのポケットに横笛をしまい込む。

「はぁ・・・」

凧沙は彼の言葉に適当に相槌を打つと、踵を返して歩き出す。顔はいい？が、怪しい人だと凧沙は思った。あまりかわらない方が良さそうだ。背中に嫌な視線を感じながらも、凧沙は歩き続ける。それでも彼は以外にも、声をかけてくることも凧沙を追ってくることもなかった。

凧沙は学校の正門の前まで来ると、歩みを止めた。

逃げるようにしてここまで来てしまったが、不思議なことにあの笛の音は、凧沙の心を引きつけてやまなかった。もう一度聞いてみたい・・・凧沙はそう感じた。

（もう完全に遅刻だ・・・）

凧沙は昇降口の時計を確認して深いため息をつく、重い足を引きずりながら音楽室へ続く階段を上り始めた。

「おはよー！凧沙！」

二階まで階段を上がると、後方から声をかけられた。踊り場にいた美春は一段飛ばしで階段を上がり、凧沙の隣で歩みを止める。

「おはよう」

凧沙は美春の顔を見ると、返事を返す。そして内心でかなりほっとした。どうやら遅刻組みは、凧沙だけではないらしい。

「美春が遅刻なんて珍しいね」

凧沙は美春に何気なく問いかけた。実際、美春が遅刻をする事なんて今まで一度もなかったはずだ。

「え！？私、遅刻なんてしてないよ？」

「・・・はい？」

凧沙は予想外の言葉に、思わず自分の耳を疑った。昇降口にある

時計を確認したとき、確かに部活開始から十五分以上はたっていたはずだ。

「あれ？連絡網回って来なかった？今日、一時間送れて始まるんだって」

「あ・・・そうなんだ」

凧沙には普段から携帯を開く習慣があまりない。それに昨日は、一日中ベッドの中にいたせいで着信音が鳴っても気づかなかったのだろう。開始時間が変わったのも知らなくて当然だ。

これで一応、遅刻はまぬがれたことになる。一安心だ。

（何か際最近、妙に運がいいような・・・）

合宿の頃から、何となくだが凧沙にとって運がいいことばかり起こっているような気がする。運が悪い事は続くと聞くが、運がいい事も続くものなのだろうか。

「凧沙！早くー！」

気がつくと、階段の一番上で美春が手招きしていた。

「せっかく早く来たんだから、一緒に自主練しようよ！」

「うん」

凧沙はそう答えると、美春の後に続き階段を上り始めた。できる限りこの運が長続きするよう祈りながら。

凧沙は部活が終わると、すぐに学校を後にした。残って練習をしてもいいのだが、凧沙にとって練習より家でくつろぐ事のほうが重要だったのだ。

朝より騒がしくなった通学路を歩いていると、またあの笛の音が聞こえてきた。凧沙は思わず歩みを止める。またあの怪しい青年が吹いているのだろうか。

曲は朝と同じものようだ。凧沙は知らないうちにこのメロディーを聞くことが大好きになっていた。

そしてゆっくりとその音に向かって歩き出した。

2 笛使いと不思議な女の子

そして気がつく、今朝と同じ場所に来ていた。あの青年は同じ場所に座ってる。そして同じように彼はメロディーを奏でていた。
(何故かまたここに来てしまった・・・)

凧沙は笛を奏でる青年を遠くから見詰めながら、軽くため息をつく。

・・・早くここから離れよう。彼に聞いていた事をきづかれると、やっかいな事になりそうだ。次に凧沙はすぐさま彼に背を向ける。

とその時、メロディーが止んだ。

「おう。来たな」

「!?!」

弾かれたように振り返ると、凧沙の背後には今朝と同じような笑みを浮かべながら立っている青年の姿があった。

「・・・・・・」

凧沙はただ黙って俯く。やっぱりこの人は変だ。”来たな”って・

・まるでここに再びやって来るのを分かっていたようではないか。

凧沙は無意識のうちに後ずさる。

「あ・・じゃ、失礼しま・・」

「やっと見つけた。あんたが最後の子供だろ!？」

彼は、長めの前髪の間から見透かすような瞳で凧沙の事を見下ろす。

(は・・・・?)

「あれー?ばれてた？」

突然、すぐ隣から可愛らしい女の子の声が聞こえた。驚いて隣に目を向けると、そこには見覚えのある子供の姿・・・合宿の時見た、

あの不思議な女の子がいた。

「・・・-!」

「なつかしいメロディーが聞こえてきたから、ついつい近づきすぎちゃった・・・ねー風沙？」

そう言っていると彼女は、風沙の腕になれなれしく抱きつく。

「ちよつと・・・」

風沙は内心で驚きながらも、反射的に彼女の腕を振りほどこうとする。しかし、彼女は手を放そうとしない。

いったいこの子は何なのだろう。少なくとも普通の子ではない事は確かだ。すると、青年は鼻で笑う。

「・・・あんた、ずいぶんその“死神”に気にいられたみたいだな」
「死神じゃないー!! テイバー!!」

テイバという名前らしいその女の子は、青年に視線を向けると怒ったように言う。

「へー。テイバっていうんだ・・・で、そっちのあんたは、風沙、だっけ？」

風沙は自分の名前が出された事にドキリとして、「はあ、まあ・・・と呟くようにそれに答える。

「じゃ・・・さよなら」

風沙は、今度ははつきりと相手に伝わるように大きめな声で言った。そして返事を待たずに踵を返し歩き出す。

テイバの手は以外にもあっけなくほどけた。大声を出したから驚いたのかもしれない。

風沙は後ろを振り返らずに、前だけを見て家への道を急いだ。

（それにしても何だったんだろう）

凧沙は家へ帰ると、自室のベッドに腰を下ろした。後から考えてみてもあの二人は絶対に怪しい・・・もしかしたら人間じゃないかもしれない、凧沙はそう思った。

（でもま・・・もう会わなければいいことか・・・）

「無理だと思うけど」

突然、目の前にティバが現れた。凧沙は一瞬、彼女の漆黒の髪とそこから除く白い肌にドキリとする。

「・・・私の考えてること分かるんだ」

凧沙はできるだけ平常心を装ってそう言った。

「うん。だって私、凧沙のことが気に入っちゃったの。だから、顔見れば考えてることくらい分かっちゃうよ？」

ティバはそう言くと、うれしそうにその瞳を歪ませる。

「だから私、凧沙から絶対離れないから！」

「・・・」

凧沙は彼女の真つ黒な瞳をじつと睨み付けた。そして静かに、しかしはつきりとした口調で言った。

「・・・離れないって言われても困るんだけど」

すると、少しの沈黙の後ティバはクスツと笑い声を洩らす。

「そんな事言っちゃっていいの？ 私は凧沙の事が大好きなんだよ？ 凧沙が望めば何でも願いを叶えることだってできるのに」

「|・・・」

その時、頭に過った考えにハツとした。今まで続いてた運のいい事って・・・

「今までの凧沙の願いを叶えてきたのは私。だって凧沙の悲しむ顔なんて見たくないもん」

「・・・」

凧沙はティバの言葉に戸惑わずにはいらなかった。

（・・・ティバは少なくとも悪い子ではないのかもしれない）

するとティバは、満面の笑みを浮かべ凧沙の隣に腰を下ろす。そ

して体の重心を凧沙にあずけた。その体の意外な軽さに凧沙は再びドキリとする。

「でも凧沙っておもしろいよね。はやく合宿を終わりにしたいとか、風邪を引きたいとか・・・でもそういう所に私は魅かれたんだー」

「うん。・・・まあ・・・」

凧沙そう言いながら、自然と笑みをこぼす。それには自分自身でも驚いた。

「凧沙ー！！ご飯よー」

一階から母親の声が聞こえてきた。時計を見ると、約六時半。夕食の時間だ。

「あ・・・」

凧沙はティバに一声かけようと、口を開く。が、そこにティバの姿はなかった。

（神出鬼没なのか・・・）

「凧沙、一人で何話してたの？」

食卓に着くと、母が待ってましたとばかりに口を開く。

「べつ別に・・・」

凧沙はできるだけ母と目を合わせないようにしながら、急いでご飯を口に運んだ。ティバは（何となく分かっていたが）自分と彼以外は見えないらしい。

「ふーん・・・で、合唱部の合宿はどうだったの？楽しかった？事故があつて早めに終わっちゃったみたいけど」

凧沙の脳裏にあのときの出来事がよみがえった。・・・もうあんな怖い経験したくない。

「別に。普通だよ」

凧沙はたんとんとそう答える。あんな事を話してもきつと信じて

もらえるはずがないだろうから。

「ふーん。部活と学校以外では外に出ない風沙のことだから、寂しがつてるのかと思ってた！」

「違うし！！」

風沙はきつぱりとそう言うと、今度はおかずに箸を伸ばした。外出しないのは、人ごみが苦手という理由があるからだ。

「風沙も明日から高校三年生なんだぞ。反対に、あと一年もすれば一人暮らししたいとか言いだすんじゃないか」

今まで2人の会話を黙って聞いていた父が、突然口を開いた。

「おっ！！出ました！父の名言！」

母は父をからかうかのように言う。

「そーだよ。私、別に寂しいとか思ってたし」

「風沙がいなくて寂しかったのは、母さんの方だったりしてな」

父はそうたんとと言った。

「違いますー！」

母はそう顔を赤らめて言った・・・どうやら図星だったらしい。

そして風沙はさっきの父の言葉で嫌な事を思い出してしまった。明日は始業式。学校が始まるのだ。

・・・それにもう一つ。風沙の頭に響いてさっきから離れない言葉。

“彼に会わないようにするのは無理”とティバは言っていた・・・それにはいったいどんな意味があるのだろう。

「おかえりー風沙」

自室に戻ると、ティバに笑顔で迎えられた。

「ティバ・・・」

風沙は軽いため息をつくとき、ベッドに座っているティバの隣に腰を下ろす。

「夕ご飯はおいしかった？」

「・・・ティバ。彼に会わないようにするのは無理ってどういう意味？」

風沙はティバの質問を無視して問いかけた。ティバは一瞬、ぶすつとした表情を見せたが、めんどくさそうにそれに答える。

「んゝそれは風沙が彼の笛の音が好きだから」

「・・・？」

「・・・だからその音に誘われちゃうんだね。昔の私みたいに」

「は・・・？」

「あつ！！でも今の私もそうかも！ほんと、こりないよね。私も」

風沙は言葉の意味が分からなかった・・・笛の音に誘われる？昔、ティバが笛の音に誘われた？

「んじゃ、おやすみ。風沙」

「あ・・・」

ティバは風沙呼び止める前に姿を消した。・・・本当に都合のいい奴だ。風沙はため息をつく、ベッドに横になった。

自分はティバが言うように、あの青年の吹く笛の音に誘われてしまったのだろうか。風沙の頭にいろいろな考えが渦を巻く。

あの時彼は、「おう。来たな」と言った。それがもし、風沙が笛の音に誘われてやって来ることを知っていたからだとしたら・・・そして自分が彼から逃げるように立ち去る時、呼び止めないのも笛を吹けば風沙がやって来るのを知っていたからではないだろうか。

風沙は急に得体のしれない不安に襲われた。彼の笛の音に、誘われてはいけない。それに、風沙には彼が笛を吹く理由が分からなかった。いったいなんの為に彼はあの不思議な音色を奏でているのだろうか。

次の日の朝。

凧沙は母にいつてきますと言うと、家を後にした。父は凧沙より早めに家を出ているので、「いつてらっしゃい」を言ってもらえるのはいつも母だけなのだ。

（あの笛の音が聞こえませんでしたように）

凧沙は内心でそう願った。聞こえてきたら、またあの綺麗な音色に誘われてしまうかもしれない。そして焦る気持ちを抑えて、学校への道を急いだ。

教室に入ると、だいたいのクラスメイトが登校していた。それぞれ楽しそうにおしゃべりに没頭しており、教室内は騒がしい。凧沙は久しぶりに見るクラスメイトの顔を見て、なつかしさを覚えた。同時に、また新しい学年が始まったことを実感させられた気にもなる。

そして凧沙はおしゃべりをしているクラスメイトの間をすり抜けて、自分の席へつく。

（よかった……。無事に着いた……）

「久しぶり。凧沙」

顔を上げると、そこには、クラスの友達、明日香あすかの姿があった。

「久しぶり」

凧沙は微笑んで言葉を返す。すると明日香は、凧沙の前の席（明日香の席ではない）にドカッと腰をおろした。

「ねー。どうだった？ 春休み」

「んー。ずっと部活だった」

「だよ。うちも部活だった。少しは休ませろーって感じ」

明日香は現在バドミントン部に所属している。やはり明日香のほうも、部活の練習はほぼ毎日あるらしかった。

「おはよう！！お二人さん！！」

突然、元気いっぱいの声が割り込んできた。顔を上げると、その声の主は美春だった。美春は部活の友達でもあるし、クラスメートでもあるのだ。

『おはよう』

凧沙と明日香は声をそろえてそう返す。

「二人ともーテンション低いなー」

「いや、美春が高すぎるんだよ」

明日香がぼそつと呟くように言う。

「えっ！？そう？普通だよー」

「ほらー。席つけー！」

担任の先生が教室に入ってきた。教室内は急に静かになり、美春と明日香を含め、それぞれ皆が自分の席へ戻り始める。凧沙は座りなおすと、担任の話を聞くため視線を上げた。

凧沙は大勢の生徒にまぎれて体育館へ移動すると、指定の位置に腰をおろした。これから始まるのは始業式。先生たちの長い話や、賞状伝達などの退屈な時間だ。

凧沙は式の間中、あの青年の事で頭がいっぱいだった。彼は何のためにあの不思議な笛を吹いているのだろう。そして何となく、凧沙は“笛の音に誘われる”という話をどこかで聞いたことがあるような気がしていた。

どこだっただろう・・・思い出せない。

凧沙は少なくとも今日一日、そのことに悩まされながら、一日を過さなければいけなくなってしまうていた。

「風沙！途中までかえろー」

机で荷物をまとめていると、美春が自分の荷物を持ってやって来た

「え？部活は？」

「今日はないんだって。さっき伝言まわってきた」

「まじ？」

風沙は美春の言葉に思わず心が躍る。

（ティバのお陰だったりして・・・）

「風沙、美春、今日部活ないんだって？」

明日香が二人の後方から声をかけてきた。

「うん。まあね」

風沙は肩越しに振り返り、それに答える。

「あたしはこれから部活だー。じゃね、二人とも」

明日香はそう言うと、教室の入り口で待っていた部活の友達らしき人と一緒に姿を消した。

風沙は校門まで来ると、美春と別れた。美春とは家が反対方向なのだ。

風沙はできるだけ早足で歩くように務めるようにした。あの笛の音が聞こえないうちに早く家に帰りたいと思ったからだ。

「仲村風沙」

校門を出ると、突然誰かに呼び止められた。弾かれたように振り返ると、そこにはあの青年がいた。風沙は驚きのあまり、一瞬固まる。

「夕斗^{ユウト}またな」

「おう」

彼は友達らしき人に軽く答えると、凧沙に歩み寄る。

「よ。また会ったな！」

「何でここにいるの？」

凧沙は反射的に思ったことを口にする。笛を吹いていた青年―夕斗は凧沙の言葉にたんと答えた。

「何でって・・・俺、ここの生徒なんだけど」

「・・・！」

確かに夕斗はこの学校の制服を着ている。凧沙は馬鹿げた質問をした自分が恥ずかしくなった。

「じゃ・・・」

一刻も早くここから立ち去りたいと思い、凧沙は呟くように言う
と夕斗に背を向けて歩き出す。その時、突然腕を掴まれた。

凧沙は夕斗の予想外の行動に驚き、肩越しに彼の顔を見る。

「放して。またあの笛で呼び出せばいいことですよ？」

確証はなかったが、凧沙は苛立ちの混じった声でそう言った。

夕斗は一瞬、驚いたように目を見開いたが、それはすぐにいつもの怪しい笑みにかき消される。

「あれ、知ってたんだ。まあいいや。一緒に帰らない？方向同じだし」

凧沙はドキリとした・・・やっぱりティバの言ってたことは本当だったんだ。凧沙は警戒するような視線を夕斗に向ける。

「さー、行こうか」

夕斗は凧沙の視線をかるく受け流すと、凧沙に背を向けた。

（いったい何・・・）

彼はそんなに悪い人には見えない。しかし、いい人にも見えない
様な気がする。凧沙は不安を抱きながらも、彼の後についてゆつくりと歩き出した。

「んで、その死神に聞いて、自分が俺の笛の音に誘われているって感じたわけだ」

「・・・うん」

風沙は夕斗と肩を並べそう答える。何を言ってくると思いきや、彼が口にしたのは不思議な女の子―ティバについてだったのだ。

「っていうか・・・何でティバのことを”死神”って呼ぶの？どう見てもティバは死神には見えないんだけど」

「・・・俺にとっては死神だから」

「は・・・？」

風沙は意味が分からなかった。夕斗にとってだけ、ティバは死神という存在になるという事なのだろうか。

「でも俺以外にも、死神になる可能性はある」

「え？どういう・・・」

「まっ！せいぜい風沙にとっても、死神にならないように気をつけた方がいいと思うけど」

「は・・・？」

「じゃー、またな」

風沙が質問を投げかける前に、夕斗は丘を下りて行った。どうやらこの近くに住んでいるらしい。

（意味分かんないし・・・）

風沙はただ茫然と、彼の後姿を見送ることしかできなかった。

「ただいまー」

風沙はそう言うと、家の玄関の扉を開けた。家に誰もいないことは分かっていたが、それが何となく風沙の口癖になってしまってい

るのだ。

すると、凧沙のすぐ隣にティバが姿を現した。

「凧沙！ーえらいでしょ。ちゃんと」家にいる時以外姿を現さない
”っていう約束守ったよ！”

嬉しそうにそう言っていると、凧沙の腕にしがみつく。

「あーえらいえらい」

凧沙は流すようにそう言っていると、スタスタと自室への階段を上がる。
そして制服をハンガーにかけ、楽な格好に着替えると、机の前の
椅子に腰をおろした。ティバが後ろで何かぶつぶつ文句を言ってい
たが、あえて聞こえない振りをする。

その最中にも凧沙の頭の中で彼の言葉がぐるぐると渦をまいてい
る。ティバが自分にとって死神にならないよう気をつける？本当に
意味が分からない。それともタ斗は、自分をからかって楽しんでいる
だけなのだろうか。

そしてふと、机の上に積み重ねられている教科書の中の一冊の児
童書に目がとまった。その背表紙にはこう書かれている。

『ハーメルンの笛吹きの子』

凧沙はドキリとした。昔はこの物語が好きで繰り返し読んでいた
ことを思い出しながら、それを手に取る。

・・・確かこの本の中に出てくる笛使いは、不思議な笛を使って
子供たちを呼び出していた。昔の記憶をたどるようにして、凧沙は
再び物語を読み返す。あらずじはこうだ。

《場所は1200年代後半のドイツ。ある笛吹きがハーメルンの町
のねずみを人々に頼まれて駆逐した。しかし、人々はその笛吹きと
約束していた謝礼を渡さなかった。そして笛吹きは数日後、その町
の子供たち130人を誘拐した。子供たちが再びハーメルンの町に
戻ってくることはなかった。》

凧沙はため息をつくとき、本をパタリと閉じる。この物語が彼の笛

に関係しているとはどう考えてもありえない。それにこの物語はただの絵本の中の話でしかないし、実際にハーメルンの笛吹きがいたとは考えられない。

すると、後ろからその本を覗いていたティバが口を開いた。

「あれ？この物語、私たちが生きていた時起こった出来事とそっくり！」

「え！？」

するとティバはベッドに腰をおろすと、昔を懐かしむかのように話し出した。

「風沙には話してなかったと思うけど、私が生きていた時代はとっくの昔に終わってるの。でも今もなぜか私はここにいる。多分それは、あの日聞いた笛の音が忘れられないから」

「・・・笛の音？」

「うん。正確に言つと、あの日子供たちは誘拐されたのではなくて、笛吹きの男が吹く音色に誘われたの。そして私もその中の一人だったってわけね」

「・・・」

風沙はティバの真つ黒な瞳をじつと見つめる。その瞳から伝わってくる少しだけ寂しそうな雰囲気は、それが嘘ではない事を証明しているように感じた。

「あ！そういえば言おうと思ってたことがあるんだけど！多分、彼の笛の音に誘われているのは風沙じゃなくて、私。私が風沙を気にしちゃったからその影響が風沙にも出たんだね」

ティバはくるつと表情を変えて楽しそうにそう言った。

風沙はしばらくの沈黙の後、「あつ。・・・そう」と呟くようにそれに答える。

そして何となくだが、ティバの謎に包まれていた部分が少しだけ見えてきたような気がして安心した。風沙は椅子から立ち上がると、ティバの隣に腰を下ろす。そしてボソツと呟いた。

「ティバがああの音に誘われるの分かる。私もあのメロディー大好き

かも」

「ただいまー」

夕斗はそう言いながら玄関の扉を開けた。

「お帰り兄さん」

玄関からリビングへ向っていると、リビングの扉から弟の夕理ユウリがひよっこりと顔を出した。

「おー！帰ってたのか。夕理。中学のほうが早かったんだな」

「うん。まーね」

夕斗はソファーに鞆を置くと、そのまま隣にある和室へ向かう。

そしてその部屋の端にある仏壇の前まで来ると、そこに腰を下ろした。

その仏壇には夕斗にそっくりな顔で笑っている男性の写真が置かれている。

イガラシユウキ

――五十嵐 夕希。

夕斗と夕理の一番上の兄にあたる人物だ。夕斗はおりんを一回鳴らすと、静かに手を合わせる。

（ただいま。兄貴）

夕希は今から約四年前に死んだ・・・いや、殺されたと言ったほうが正しいかもしれない。あの死神の手によって。

「おーい！！夕理。夕理も兄貴に挨拶しろよー」

「はい」

すぐに返事が聞こえ、夕理が部屋に入ってきた。夕斗は夕理と入れ違いに部屋を出ると、二階にある自室へ向かった。

そしてその日の夜。タ斗は漫画を読む手を止めると、机の引き出しを開けた。

そこには錆びついた銀色の笛がしまっており、これが自分の一族が呪われている、原因の“ハ・メルンの笛”だ。

以前はこの笛はタ希が使っていた。しかし四年前、死神の呪いによつて殺された・・・そして次は自分が殺される番だ。

自分がこの呪いを解かなければ、兄貴のように三十歳まで生きられないだろう。

（でももういいんだ）

そう・・・呪いをかけた死神が見つかったのだ。風沙の体に住みついているみたいだが、そんな事は関係ない。

130人目である、あの子供をこの笛に封印すれば自分の一族の呪いは解かれる。自分も普通に年をとって死ぬことが許されるのだ。

「何かいいことがあったのですか？タ斗」

突然穏やかな声がした。肩越しに振り向くと、とんがり帽子を深くかぶり、長いローブを着た男がそこに立っていた。

彼こそがあの“ハ・メルンの笛吹き”の男”と言われているコーガンドだ。

「あれ。分かった？」

タ斗は引き出しを閉めると、ベッドにどかと腰をおろす。

「あんたが誘った130人目の子供が見つかったんだよ」

「ほう。それは良かったですね」

するとタ斗は顔をしかめた。

「ってか、コーガンドのせいで呪われたのに“良かったですね”はないだろ！」

「はいはい。そうでした。呪いが解ければ私も子孫の事を心配せずに、この世から巣立つことができそうです」

「ほんとに成仏する気あんなのかあ？」

そう言うと、タ斗は仰向けに寝転がった。顔には無意識のうちに

笑みが浮かんでしまう。

それはそうだ。あと少しでこの呪いから解放されるのだから。

・・・兄貴が成し遂げられなかった事を自分が代わりに成し遂げることができるのだから。

夕理が自分と同じ運命に陥ることもないのだから。

(必ず・・・)

そう・・・必ず、どんな事しても、あの死神を封印してみせる。

3 鎌と生命力

凧沙はいつもの時間に目を覚ますと、朝食をとるため、一階へ向かった。リビングへ入ると、ちょうど父が仕事に出かけるところだった。

「じゃ、凧沙行ってくるからな」

「いつてらっしゃい」

凧沙は流すようにそう言うと、台所へ向かう。父の朝は早い。ほぼ毎日凧沙が起きるのと同時に家をでる。

「おはよ・・・」

凧沙は台所にいるはずの母に向かってそう言った。だがいつもすぐに返ってくるはずの返事が来ない。

(・・・?)

不安になって、いつも母が立っている場所を覗いてみると、そこにはぐったりと横たわっている母の姿があった。

「!!!!お母さん?」

そして凧沙はさらに大きく目を見開いた。倒れている母の隣に、背丈以上の大きな鎌を持ったティバが立っていたのだ。

「あつ。おはよー。凧沙」

ティバはいつものように凧沙に笑いかける。凧沙はその笑みに思わずゾクリとした。

「ティバ・・・?何してるの?」

声があったように出ない。まるで今のティバは・・・“死神”のようだ。

「何って・・・食事だよ?」

「・・・っ」

風沙はティバの言葉もほとんど耳に入らずに、母に駆け寄る。

「お母さんっ！！起きて！」

風沙は母の体を思いきりゆすった。……このまま目を開けなかったらどうしよう。

「ん……風沙？」

母は思っていた以上にすぐに目を開けた。風沙の顔に自然と笑みがこぼれる。

「あれ？いつの間にか眠っていたみたい。貧血ぎみなのかしらね」

母は呟くように言うと、何事もなかったかのように立ち上がり、食事の用意を始めた。

「風沙あ。食事の邪魔しないでよー」

すぐ隣に立っていたティバがイライラしたような声をあげた。もうあの大きな鎌は持っていない。

「食事って……」

風沙はその言葉に思わず力チンとする。母は食べ物じゃない。

「だって私のご飯は“人間の生命力”だよ？食べなかったらお腹すいちゃうよ」

「……だからって……」

風沙はそこまで言うと、口をつぐんだ。母や他の人の生命力を奪われることは、風沙にとって嫌なことではない。でもそれを言ったら……ティバに「死ね」と言っているようなものではないのだろうか。

（いや、実際ティバはずっと昔に死んでるのかもしれないけど……）

「風沙、何一人でぶつぶつ言ってるの？」

気づくと、母がじつとを観察するような目つきでこちらを見ているのが分かった。

「あー。独り言だよ」

風沙はとっさにそう言う。

「ふうん……幽霊とでも話してたりして」

「あ。はははは・・・」

凧沙は母の視線から逃げるようにして、その場から立ち去った。
幽霊・・・間違ってるわけではないのかも。

学校に着くと、教室にはすでに美春と明日香の姿があった。凧沙は鞆を自分の机に置くと、話し込んでいる二人のほうへ向かう。

「おはよう。美春、明日香」

「おはよー！凧沙」

「凧沙、おはよ」

二人はいつものように言葉を返す。

「凧沙は今日の漢字テストの勉強した？明日香はやったんだって！えらいよね」

「別に普通じゃん」

「私もやってないから大丈夫だよ」

昨日の夜、ずっと漫画を読んでいた事を思い出しながらそう答える。今日のテストは一ケタ代かも。

と、突然自分の右手に目が止まった。そして驚きのあまり息をのむ。自分の手には、今朝ティバが持っていた鉛色の鎌が握られているのだ。

（え・・・？）

そして次の瞬間、それは近くにいた美春の背中を切り裂いた。

「！！！！！！！！」

美春はそれと同時にその場に崩れるようにして倒れる。

「ちよつと！！美春！！」

明日香が慌てて美春を抱きかかえる。凧沙は目の前が真っ白になった。

（ティバ・・・！？）

そして倒れている美春と、それを驚きと不安の表情で見守っている明日香を背にして一目散にその場から逃げ出した。

凧沙はいつの間にか屋上に来ていた・・・とても息が苦しい。そしてフェンスに寄りかかるようにして、その場に座り込む。

「あー。とうとうやつちゃったんだ」

突然、少し離れたところで声がした。驚いてその声の主を探すと、凧沙の少し離れたところに夕斗が座っていた。どうやら、もともとここにいたらしい。

夕斗は手に持っていた、あの不思議な笛をズボンのポケットにしまい込むと、その場でゆっくりと立ち上がる。

「やつちゃったって何が・・・」

凧沙はできるだけ落ち着いた声でそう言った。すると夕斗は口元に不気味な笑みを浮べる。

「人殺し」

「！！私、人なんて殺してない」

確かにあの時美春は倒れてしまったが、きっと大事には至らないだろう。今朝の母のように。

すると夕斗の口元に再び笑みが浮かんだ。

「あー。そうだな。まだ、殺してないな。けどそのまま、死神に好き勝手に体を使われ続けたらどうなると思う？」

「・・・・・・」

「お腹をすかせた死神は、凧沙の周りの人間の生命力を奪い続けるだろうな。そしたら凧沙も・・・死神だ」

「・・・・」

凧沙は唇をかみ締めた。

「それなら・・・どうすればいいの？」

「んなの、簡単なことだろ？」

そう言つと、夕斗は風沙の目の前まで歩み寄り、その歩みを止めた。

「突き放せばいいんだよ。あいつは風沙の言葉には忠実みたいだな」

「！！・・・だつてティバはまだ子供・・・」

その風沙の言葉に夕斗の目つきが変わつた。そして突然、夕斗は風沙が座り込んでいるすぐ隣のフェンスを乱暴に蹴り飛ばす。

「甘いこと言つてんなよ。あいつは普通の子供じゃない。ただの死神だ」

「・・・」

風沙は口をつぐんだ。確かにこのままの状況が続いたら、友達や他の人々を危険な目にあわせてしまう。

だからと言つてティバが悪いわけではない・・・ティバはただ単にお腹がすいているだけなのだから。そして次の瞬間、再び風沙の右手にあの鉛色の鎌が現れた。

「！！」

風沙はティバにされるがままに立ち上がり、夕斗めがけてそれを振るう。

「・・・！！」

しかし、風沙の腕は空中で夕斗につかまれた。

「死神、すぐに封印してやるから待ってろよ」

夕斗は風沙の瞳をとらえてそう言つと、風沙に背を向け屋上から姿を消した。

風沙は夕斗の姿が見えなくなるのと同時に、その場にしゃがみ込む。

（何で私がこんな目に・・・）

「凧沙、大丈夫？」

突然、目の前にティバが姿を現した。

「・・・ティバ、何で私のからだを使ってまで美春やタ斗を襲うの？」

凧沙はため息交じりにそう言った。

「ごめんね。凧沙・凧沙の体を借りたのは家以外では姿を現さないって凧沙と約束してたから・・・あと襲ったのはお腹すいてたから・・・」

ティバはすまなそうにそう呟く。そして凧沙は思わずティバから視線を外した。

そんな顔しないでよ・・・私が悪い人みたい。

「でもねっ凧沙。私の鎌は特別だから血はでないの。私のご飯は生命力だから」

「・・・うん」

凧沙はそう言うのと、顔を伏せた。確かにティバの鎌は人を傷つけるためのものではない。けれど・・・使い続けたらタ斗が言っていたように結果は同じになるだろう。

「でも学校ではやめて」

凧沙はそれと同時に顔を上げる。しかし、そこにティバの姿はなかった。

教室に戻ると、普通に授業が行われていた。凧沙はクラスメイトの視線を感じながら、自分の席につくと一番前の列の美春の席に視線を移す。

美春は何事もなかったかのようにして、凧沙に向かって軽く手を振っている。凧沙はそれに曖昧に微笑みを返した。やはり軽い貧血

で済んだのかもしれない。

その日、風沙は勉強にも部活にも身が入らなかった。脳裏に浮かぶのはティバの顔。……私はティバに何をしてあげられるのだろうか。

その日の夜、風沙は知らない街に立っていた。辺りは静寂と闇に包まれており、空には半月の月が浮かんでいる。そしてよく目を凝らしてみると、周りには可愛らしいつくりの木組みの家が並んでおり、下にはまっすぐに石畳の道が続いているのが分かった。

そして私はなぜかその中を必死で走り続けていた。そして目の前に行く人影が見えた。どうやら大きな帽子をかぶった男の人のようだ。

「まって！！コーガンド様！！」

私は必死でその人に呼びかかる。しかし自分はコーガンドという人は知らない……。いったい誰なのだろう。

「置いて行かないで！！」

それでも私は必死で叫び続ける。しかしその人は、歩みを止めようと振り向こうともしない。

あと少しで自分の手があの人の手に触れる。私は必死になって腕を伸ばした。

「風沙」

風沙は突然呼びかけられて目を覚ました。目の前に広がるのは、見慣れた天井……どうやら夢を見ていたようだ。

「おはよ」

ティバは風沙を見降ろしながらそう言う。

「もう学校行く時間だよー」

「……うん」

風沙はのろろと体を起こす。それと同時に昨日のことがありありと頭の中に流れ込んできた。

風沙は、昨日のあの時から寝るときまでティバの事について考えていた。ティバが生きるためには人間の生命力が必要だ。その生命力をどこから手に入れるか……。

「ティバ」

「なーに？」

「ティバの食事・生命力なんだけど、私から取っていーよ」

「え？」

ティバは目を丸くして風沙を見る。

「だって他人から取らせるわけにはいかないでしょ」

ティバはしばらく黙っていたが、すぐにいつもの笑顔に戻った。

「うん。ありがとー。風沙」

風沙はその素直な答えに安心してティバから視線を外す。

だから気付かなかった……ティバの笑顔が悲しみに歪んでいることに。

「どうしたの？風沙。顔真っ青だよ」

部活が終わり、（今日は土曜なので学校はない）音楽室から出よ

うとすると、美春が心配そうに声をかけてきた。

「別に平気だよ」

凧沙は流すようにそう言うと、「ありがとうございました、さようなら」と出口で挨拶をして音楽室を出る。

振り向くと、美春が手を振っていたので、凧沙も手を振ってそれに答えた。

凧沙はいつもの通学路に出ると、ため息をつく。

（うー、気持ち悪い・・・）

やはりティバに生命力をあげているせいだろうか。くらくらして、時々視界が真っ黒になる。

しかし、凧沙は倒れるわけにはいかなかった。自分からあげると言って倒れてしまったのはティバに嫌な思いをさせてしまうし、周りにも迷惑がかかってしまう。

それに・・・家に帰って少し休めば、すぐによくなるだろう。

とその時、何かが凧沙の足にぶつかった。足もとに目を向けるとそれは・・・

（・・・ボール？）

「すみませーん、それ、こっちに投げてください!」

声のするほうへ視線を走らせると、遠くのほうで野球のユニホームを着た少年が手を振っていた。

（中学生か・・・）

凧沙はボールを拾うため、腰をかがめる。

その時、視界がグニヤリと歪んだ。その後、凧沙の視界は真っ黒になった。

ここは学校の屋上。

そこからは風と共に、優しいメロディーが聞こえてくる。屋上の隅に佇んでいる青年は指の動きを止め、そして再び音を奏で始める。「そこ、また違いますよ。夕斗」

いつの間にか青年——夕斗の前に現れた暗い色のローブに身を包んだ男——コーガンドは、落ち着き払った声でそう言った。

「分かってるよ」

夕斗はそう言うつと、ため息をつく。夕斗が練習しているこの曲は、風沙（風沙に憑いている死神）を呼び出した時のとまた違う。

これは・・・封印するための曲だ。

「何で兄貴やコーガンドは、こんなに笛が上手く吹けるか不思議だよ」

すると、コーガンドは微笑んだ。

「・・・簡単なことですよ」

「？」

すると、コーガンドはベルトに掛けてあるナイフを取り出し、それをポケットから取り出した布で磨きながら言う。

「夕斗に足りないものは“楽しむ気持ち”です・・・あなたのお兄さんはいつも楽しそうに私と練習していましたよ？」

「・・・は？」

「・・・まあ、あせらずゆっくりいきましようって事ですね。最近の夕斗はどうもイライラしているようですし」

そう言い終えると、コーガンドはナイフの刃を太陽の光にかざし満足そうに微笑んだ。

「・・・」

夕斗はコーガンドから視線を外す。こんな時思い浮かぶのは兄貴の顔だ・・・そしてその顔はいつも何故か笑っている。兄貴の顔といたら、笑顔しか浮かばないのだ。

（兄貴はこんな運命でも、楽しめたのか・・・？）

少なくとも、自分は楽しめない。だから一刻も早く、あの死神をこの笛に封印したいんだ。

「俺はゆっくりなんかにしてられない・・・兄貴のためにも・・・
っていないし！」

さっきまでいたはずのコーガンドの姿がいつの間にか消えていた。
・・・話を聞いているのか、いないのかよく分らない奴だ。

タ斗はその場で伸びをする。そして青すぎるほどの空を仰いだ。

目を開くと、そこにはまたあの町並みが広がっていた。

でも今度は私は走っていない。街灯の下にうずくまり、震えている。そして何故か私の目からは止まりそうにもない涙が次々と溢れ出ていた。

（・・・っ・・・。何で置いていかれなきゃいけないの・・・？私はずっと一緒にいたかったのに・・・！）

あの人は私に優しくしてくれた。始めてあつた時だってそうだ・・・やさしいメロディーが聞こえてきて、行ってみると、そこにはあの人がいた。

・・・私はあの人に一目惚れしてしまったのかも知れない。
夕日を背景にメロディーを奏でるその横顔は、とても綺麗だった。
彼は私に気づくと、メロディーと同じようにやさしく微笑んでくれた。

でもその彼はもういない。私をおいて行ってしまった。
今まで優しく接してくれたのが嘘のように私を冷たく引き離れた。
きっともう彼とは思いつく出の中では会えないだろう。

（ぜったいやだ・・・私はいつまでもあの人と一緒にいるって決めているのに）

と、その時頭上から何かがひらりと舞い落ちてきた。何かと思い手にとって見ると、それは羽だった。

―真っ黒な。

「置いて行かれたか。娘」

「！！」

驚いて見上げると、そこにはいつの間にか大柄な男が立っていた。彼は背景の闇に溶け込むような、真っ黒な髪に真っ黒な服、そして真っ黒な翼を持っている。

しかし彼の瞳だけは唯一、綺麗な金色に輝いており、とても綺麗なだ。

私は今自分の目に映っている光景に息をのむ。

―彼の姿はまるで“悪魔”のようだ。

「本当に可愛そうなやつだな」

彼はそう言う、私の前にしゃがみ込む。そして彼の瞳と眼が合うと思わずドキリとした。

見た目からして、彼はあの人と同じくらいだろう。しかし、あの人とは正反対といってもいいほど全然違う。

その人を射抜くような鋭い瞳がそれを物語っているように感じた。

4 夜の闇と金の瞳？

「お姉さん、大丈夫？」

「！？」

目を開けると、そこには見知らぬ天井が広がっていた。そして初めて見る少年の顔が、心配そうに風沙の顔を覗き込んでいる。

「えっと・・・ここどこ？」

風沙は体を起こしながら少年に尋ねる。どうやら、ボールを拾おうとしたときに倒れて、この部屋のソファーに運び込まれたらしい。「ここは俺の家だよ・・・ごめんね。俺が飛ばしたボールのせいで倒れちゃったんだよね？」

「ううん、もう平気だから大丈夫」

風沙はそう言うと、少年の顔をチラッと盗み見た。どうやら、あの時野球をしていた少年のうちの一人らしい。目がクリツとしていて、とても可愛い顔をしている。

「名前、何ていうの？」

風沙は少年に問いかけた。

「五十嵐夕理だよ」
イガラシユウリ

夕理は微笑みながらそう答えた。

「そうなんだ・・・私は仲村風沙」

（それにしても・・・五十嵐ってどこかで聞いたような・・・）
すると夕理は、風沙の隣に静かに腰を下ろす。

「風沙さんかあ。じゃあ、風ねーさんだね」

「はあ・・・」

風沙は夕理に向かって微笑んだ・・・少し照れくさい。

「ジュース飲む？」

夕理はそう言うと、立ち上がり部屋から出て行った。

そしてしばらくすると、両手にオレンジジュースを持って戻ってきた。

「どうぞ。凧ねーさん」

「どうも・・・」

凧沙は素直に受け取ると、一口だけ口にそれを含む。それと同時に甘いオレンジの味が口に広がった。

「あっ・・・」

夕理は何かに気づいたように小さく声を上げると、再び部屋から出て行ってしまった。

（どうしたんだろ）

そしてオレンジジュースを片手に持って戻ってきた。

「・・・？」

そしてそれを凧沙の飲みかけのジュースの隣にそつと置く。

「どうぞ。オレンジジュースは好き？」

「うん！ありがとー」

驚いて隣に目を向けると、そこにはティバがいつの間にか座っていた。

（夕理くんにはティバが見えてる・・・？）

「凧沙ーこの人には私が見えるんだねー。見えるのは凧沙と、今の笛の持ち主だけかと思ってた！！」

「・・・うん」

「・・・多分俺が見えるのは、兄さん達がああのへんな笛の使い手だからだと思っんだよねー」

凧沙は今の夕理の言葉を聞いて確信した。

（夕理くんはやっぱり・・・）

「夕理くんのお兄さんって・・・夕斗・・・だよな？」

「そうだよ。すごいなー、何で分かったの？」

「んー、ちよつとね・・・」

凧沙はこの事実が分かった以上、この家にいるのはまずいと思った。夕斗とはあの時以来会ってない。何となく、会うことが気まず

く感じてしまうのだ。

「ねえ、夕斗は今家にいるの？」

「兄さんなら今朝早く出かけて、さっき帰って来たんだけどまた何か思い出したように出て行ったよ」

「そっか」

「まあ兄さんの事だから、何か忘れ物でもしたんじゃないかな」

風沙は心で溜息をつく。少なくとも今の所は安全だ。

「ねー夕理くんのお兄さん怖いよねー。でも夕理くんは優しいから好きだよー。でも私が一番好きなのは風沙だけどっ」

ティバはそう言っていると、風沙のほうに体を倒す。風沙はティバの行動を無視してジューズを口に運んだ。

（そう言ってもらえて嬉しいんだけど・・・わざわざこの場で言わなくてもいいのに・・・）

すると夕理が顔に満面の笑みを浮かべて言う。

「ほんと、風ねーさんはその女の子の幽霊に好かれてるんだね」

「・・・」

（夕理くんはティバの事、死神とは呼ばないんだ・・・）

風沙はその事が少し嬉しく感じられた。風沙はティバを夕斗がいうような死神と認めてしまうのが嫌だった。

だって死神はもつと怖いものだと思う。ティバは死神のような大きな鎌を持っているけど、それは見た目の姿であって本当の姿は普通の女の子と変わらない。

そんなティバを死神と呼ぶのは絶対に間違ってる。

「夕理くん、私の名前はティバっていうんだよ」

「そうなんだ。よろしくね。ティバちゃん」

夕理はそう言っていると、ティバに笑いかける。

風沙はそんな二人の姿を見て自然と笑みが浮かんだ。こうして見ると、ティバが本当に普通の女の子に見えてくるように感じる。

「でもね、ティバちゃん、風ねーさんの力、あまり取っちゃダメだ

よ。凧ねーさん疲れちゃってるみたいだから」

凧沙はハッと夕理の顔を見る。

（そんな事まで分かっちゃうんだ・・・）

「だいじょぶだよ！！お腹すいちゃうけど、凧沙のためなら少しくらい我慢できるから！！」

ティバはそう言うのと、今度は凧沙の腕にしがみつく。凧沙はティバにされるがままにして、軽くため息をついた。

（本当にそうだといいんだけど・・・）

「ねっ！凧沙、家の中探検しよー？」

ティバは唐突にそう言うのと立ち上がり、凧沙の腕を引っ張ってき
た。

「・・・あー・・・」

凧沙はチラッと夕理の表情をうかがった。夕理は凧沙の視線に気づくと、微笑む。

「どうぞ。いつてらっしゃーい。あ、でも俺の部屋は見ないでね」

「・・・うん」

凧沙はそう言うのと、ティバと共に歩き出した。

（ちよっと・・・面白そうかも）

ティバは二階にある一室のドアをゆっくりと開けた。今、ティバの心臓は緊張のあまり張り裂けそうなほど高なっている。

・・・この家に来てから感じていた、あの人の気配。それがこの部屋から感じたのだ。

（もしかして・・・コーガンド様がこの部屋にいる・・・？）

「|・・・！・・・アニタ・・・レイタ・・・？」

ティバは驚きの余り目を見開いた。そこにいたのはあの人・・・

ではなく、あの頃の懐かしい友達だったのだ。

「っ……ティバ？」

真ん中のテーブルでスケッチブックを広げていた、女の子「アニタは信じられない物を見るような眼でティバを見詰め、そう言った。そしてその隣で、本を読んでいた、男の子——レイタは視線を上げると、アニタと同じようにティバを見る。

「アニタとレイタだー！久しぶりだね」

ティバは驚きを感じながらも、顔に満面の笑みを浮かべそう言った。

「それにしても、二人はやっぱりそっくりだねー！！女の子と男の子なのにー」

ティバはそう言いながら、二人の間に腰を下ろす。

そして二人の顔を交互に見渡した。その顔や身にまとう雰囲気は昔のまま何一つ変わっていない。

二人はティバと同じ年で、双子だ。二人とも綺麗な緑色の目と、ウェーブのかかった金髪を持っていて、女の子の方のアニタはそれを二つに縛っている。

「ティバ……今までどこにいたの？」

アニタは呟くようにそう言った。ティバはその言葉に思わずドキリとする。そしてあの時の出来事がよみがえった。私は……あの時この二人を裏切ったのかもしれない。

「アニタ達こそ何でここにいるのー？」

ティバは笑顔で二人にそう問いかける。アニタの表情がかすかに動いたように見えたが、アニタはそのまま言葉を続けた。

「……私たちはコーガンドが持っていたハーメルンの笛に封印されているの……だからこそ私たちはここにいないことができる」

「……そうなんだー」

ティバは“コーガンド”という言葉にドキリとしながら、できるだけ平常心を装い目の前に広げてあるスケッチブックを覗きこむ。

そこには月や星が色鉛筆らしきもので描かれていた。

（そういえば、あの時もこんな月や星がでていたっけ・・・）

「ティバこそなんでこんな所にいるんだよ？」

今度はレイタが、たんたんとした口調でティバに問いかける。

「私は・・・コーガンド様を探しにきた・・・の」

・・・いると思って来たこの部屋に彼はいなかった。しかし、いなくてどこか安心して居るのは気のせいではないだろう。きっと自分は・・・彼に会うのが怖いのだ。

「コーガンドなら最近見てないな」

「私もよ」

レイタとアニタは声をそろえてそう言う。

「でも笛ならあるわ」

アニタはそう言うのと、静かに立ち上がり、近くにあった机の引き出しを開けた。そしてそこからあの笛を取り出した。

「今の持ち主は、いつもここにしまっているみたいね」

「・・・!!」

ティバは立ち上がると、アニタから笛を受け取る。確かにその笛は、彼が吹いていた物と同じだった。そしてティバはそれをギュッと握りしめる。

（私・・・コーガンド様に嫌われちゃったかな・・・）

「ティバの髪って黒かったっけ？」

いつの間にかベッドに腰をおろしているレイタが突然口を開いた。
「いいえ・・・確か前は綺麗な赤毛だった。そして瞳の色も黒じゃなく、薄いグレーだったわ」

アニタが読み上げるようにスラスラと言う。ティバはその言葉に凍りついた。そしてあいつの顔が脳裏に浮かぶ。

「気づいたー？髪の色、黒く染めたんだー！でも瞳の色はもともと黒だったよ？」

ティバは二人に向かって笑いかけた。・・・ちゃんとした笑顔、なっている自信はなかったが。

『・・・・・・』

アニタとレイタはティバの顔をどこか悲しげにじっと見つめるだけだった。

時は少しさかのぼり・・・・・・。

風沙は部屋を出ると、歩みを止めた。

「風沙―何してるの―？ 先行っちゃうよ？」

「行つてていーよ」

「はーい」

ティバはそう言うと、階段をパタパタを駆け上がって行った。

（何だろ・・・この匂い）

そして風沙は隣の部屋を覗き込む。

（あ・・・）

それは線香の香りだった。その部屋は畳になっており、その部屋の端っこに仏壇が置かれている。そして、その仏壇の中に立てかけてある写真に目が止まった。

その写真の中で笑っている彼は夕斗と夕理にそっくりだ。違う所といえば、夕斗より大人っぽい顔をしているということと、髪型くらいだ。（彼は前髪を分けて、おでこを出している。）

（お兄さん・・・かな？）

「うちの一番上の兄さんだよ」

「！」

肩越しに振り返ると、いつの間にかそこには夕理が立っていた。

「といつても、四年前に死んじゃったんだけどね」

「そうなんだ・・・」

風沙は顔を伏せた。まだ若いのに・・・こんな悲しすぎる。

「・・・・・・交通事故？」

すると、夕理の表情が今までにないような色に染まる。

「違うよ・・・夕希兄さんは死神に魂を持っていかれたんだ」

凧沙は大きく目を見開き、夕理の顔をみた。

（死神・・・？）

彼は何かの例えでそう言っているのだろうか。それとも・・・
本当に死神に魂を持っていかれたとでも言うのだろうか。

凧沙の脳裏に大きな鎌を持ち、黒いフードを被った人の姿が浮かぶ。そしてそいつは写真の中の人物に向かって何のためらいもなく、
鎌を振り下ろす。

凧沙はその考えを頭から追いやった。そして次にティバの笑顔が
浮かぶ。

（そういえば何で夕斗はティバの事を“死神”って呼ぶんだろう）

「って言うのは冗談だよ」

「は？」

顔を上げると、そこにはいつもの夕理の顔があった。

「夕希兄さんは心臓の病気で突然亡くなっちゃたんだ」

「そう・・・なんだ」

「・・・」

そしてしばらくの沈黙の後、夕理が静かに口を開く。

「そういえばティバちゃんは今？凧ねーさんと一緒に出て行ったのに」

「あ・・・」

一瞬、ティバの存在を忘れていた。確か最後に見たのは、階段を
上る後姿だ。

「多分、二階」

「そうなんだ。んじゃ、行ってみようよ」

夕理はそう言つと、先頭をきつて歩き出す。そして凧沙もその後
に続いた。

（ティバ・・・変な事してないといいんだけど・・・）

夕理は階段を上がりきると、すぐ左にある部屋の前で歩みを止めた。その部屋の扉には『YUTO』と書かれたプレートが引っかかっている。

「俺の部屋は駄目だけど、兄さんの部屋ならいくらでもみていいよー！」

夕理はニヤーと笑いながらそう言うと、扉をなんのためらいもなく開けた。

（まっ、いつか）

そして風沙は夕理越しに夕斗の部屋を覗き込む。

全体的に殺風景な印象を与える部屋だと風沙は思った。扉の向かい側にはベッドが置かれており、右手側には勉強机が置かれている。そして左手側には本棚が並べてあった。

そして、その間には・・・

「ティバ！」

「あー！風沙だー！」

ティバは風沙を見つけると、こちら側に駆け寄ってきた。

「何してたの？」

するとティバは、ニッコリと微笑む。

「アニタとレイタと一緒に遊んでたー」

「？」

風沙がふと視線を下に向けると、見知らぬ女の子と男の子が風沙をじっと見つめていることに気づいた。

「あっ・・・どうも」

風沙はぎこちなく二人に笑いかける。

「あ。夕理だわ」

「本当だ。夕理だ」

「・・・？」

気づくと、二人の視線は風沙の隣に立っている夕理に向けられていた。夕理は二人を見るとニッコリと微笑む。

「アニタとレイタじゃん。何して遊んでたんだ？またお絵かきと読書？」

「ええ」

「うん」

二人はそれぞれそう言うと、女の子が立ち上がり、夕理を引っ張って部屋のほぼ中央に置かれているスケッチブックの前に座らせた。「夕理も何か描いて」

「いいよー」

風沙はそんな二人の様子を少し離れた所で見つめる。

（仲・・・いいんだ）

「あの二人は女の子の方がアニタで、男の子の方がレイタっていうんだよー。二人は私の友達なんだー！」

ティバが風沙の腕にしがみ付きながらそう説明する。

「そうなんだ・・・」

風沙はふと思った。ティバの友達って事は二人はつまり・・・

「アニタとレイタは幽霊・・・なの？」

「うん、そういう事になるね・・・二人はこの“ハーメルンの笛”に封印されてるから、今ここに居る事ができるんだって！」

ティバは嬉しそうにそう言うと、片手に持っていた古い横笛を、風沙の前に見せるようにして出した。

（ハーメルンの笛・・・？）

風沙はこの笛に見覚えがあった。たしかこの笛は夕斗が吹いていたものだ。

・・・それにティバの言っている意味がよく分からない。この笛には優しい音色を奏でる以外にも特別な力があるとしてもいうのだろうか。

「この笛は私の憧れの人が持っていた笛なんだよー！」

ティバはそう言うと、その笛をギュツと握り締める。

（・・・憧れの人・・・）

「ティバ。それちよつと貸して・・・」

「いいよー」

ティバは素直にそう言うと、その笛を風沙に手渡す。

そして風沙はその笛を目の前まで持つてくると、観察するようにじつと見つめる。

・・・この笛には特別な秘密がありそうだ。その秘密がもしかしたら分かるかも。

とその時、風沙の目の前の風景が一瞬にして変わった。似たような造りの木組みの家が並ぶ通りに、街灯がぼつぼつと見え隠れしている。

（またあの街か・・・）

風沙はこの街を知っていた。確か、誰かの背中を必死で追いかけて、そして闇の中泣いた。そして真っ黒な翼を持った天使が現れた。天使・・・？本当にそうだっただろうか。彼は悪魔のような黒い翼を持っていたけれど、私を本当の闇から救ってくれたような気がする。

そうだ・・・私は彼のお陰でやっと流れ出る涙を止めることができたのだ。

その時、どこからか微かなメロディーが聞こえてきた。

そして風沙はその音に吸い寄せられるように、ゆっくりと歩き出した。

（・・・いた）

もう日は沈みかけて町全体を淡いオレンジ色に染めている。そしてその夕日を背景に、一人の男性と一人の女の子が優しいメロデ

イーを奏でていた。

二人はちょうど、町全体を見渡せるような高台にあるベンチに腰掛けている。

そして女の子は嬉しそうに、男の人が奏でている笛のメロディーに合わせて歌を口ずさんでいた。

二人はとても幸せそうに見えた。そしてふと、何か違和感を感じ女の子の背中に目が止まる。

二人とも顔を確認する事はできなかったが、確かに女の子の背中に見覚えがあったのだ。

すると、女の子の口の動きが止まった。それと同時に笛のメロディーも止まる。そして女の子の口が再び開かれた。

「コーガンド様」

不思議なことにそう言う声はつきりと自分の耳に伝わった。

“コーガンド” その名は、あの夜私が叫んでいた名前だ。

（違う・・叫んでいたのは私じゃない・・あの子だ）

凧沙は何となくそう思った。それではあの子はいったい誰だろう。見覚えのある背中。微かに聞こえた可愛い歌声。

そのすべてが、凧沙の知っている誰かに繋がっているように感じてならなかった。

「凧ねーさん」

「！」

気が付くと、夕焼けの街は消えていた。変わりに目の前に広がっているのは、なんのへんてつもない、部屋だ。

（戻って・・来た？）

それにしてもあの光景は何だったのだろうか。私じゃない、誰かが感じていた記憶。

それは確かにこの笛から伝わってきた。

「凧ねーさん！」

「・・・！」

名前を呼ばれて、凧沙はつと我に返る。

「えつと・・・何？」

夕理は苦笑すると、右手を手前にさしだした。

「その笛、ちよつと貸してくれない？兄さんに机から勝手に出した事がばれたら、怒られちゃうからさ」

「・・・うん」

「まあ、俺は机の引き出しにしまっておく兄さんが悪いと思うんだけどね。学校で貰ったプリントじゃあるまいし」

「あはは・・・そうだね」

凧沙は笑い混じりにそう言つと、笛を渡すため夕理に歩み寄る。

「おい！！お前ら、俺の部屋で何やってんだよ！？」

「！！！」

弾かれたように振り返ると、そこには仁王立ちで立っている夕斗の姿があつた。その顔には明らかに苛立ちが混じっているよに見える。

（ヤバ・・・）

いつの間にか部屋には三人だけになっていた。あのアニタとレイタとかいう双子の幽霊もいなくなってるし、ティバの姿もない。

（ティバまでいないし・・・）

「お帰り。兄さん」

そう言つと、夕理はいつも以上の笑みで夕斗に笑いかける。

「忘れ物は見つかった？」

「ていうか、何で俺んちに凧沙がいんだよ？」

夕斗は手に持っていた漢字のテキストをベッドに放り投げると、（凧沙はそれを見て月曜日漢字テストがある事を思い出した）凧沙に視線を移す。

「・・・どうも」

凧沙は呟くようにそう言った。

「あー！凧沙、その笛勝手に机から取っただろ？」

「えっと・・・ごめん」

凧沙は正直にそう謝罪する。それはティバから受け取ったものだったが、今の夕斗にそれを言ってもこの状況は変わらないだろう。

「ていうか、兄さんがもつと見つからない場所にしまっておくべきだと俺は思うよ。そんなに大切なものだったらさ」

「うるさいなー」

「今返すから」

凧沙はそう言つと、夕斗に笛を差し出した。

「おう」

夕斗は凧沙が握っている笛に手を伸ばす。

「！！」

「！！」

凧沙は驚きのあまり息を呑んだ。笛が手から離れない。凧沙はしっかりと笛を握り締めている。

（まさか・・・ティバ！？）

夕斗は眉間にしわを寄せ、力強く笛を引っ張る。

「凧沙！！離せよ！！」

「あ・・・これには理由が・・・」

と、その時凧沙の左手に鉛色の大きな鎌が現れた。

「！！！！」

その瞬間、夕斗の目つきが変わる。

「夕理！！凧沙から離れろ！！」

「！？」

しかし遅かった。凧沙は夕理めがけて鎌を振り下ろす。それと同時に夕理が床に崩れるようにして倒れた。

（・・・どうしよう！！）

凧沙には今の状況をどうすることもできなかった。ティバにされ

るがままに動くことしかできない。そして今度は夕斗めがけて鎌を振るった。

しかし夕斗は鎌の柄の部分を素早く押さえつける。

「風沙・・・！まだあの死神と一緒にいんのかよ！？」

「・・・・・・」

風沙は黙って俯いた。こんな状況に陥っているのが自分のせいだということが、ひしひしと夕斗から伝わってくる。

「生命力、全部取られてもしんねーぞ」

その時、風沙が持っていた鎌が消えた。そしてそれと同時に逃げるようにして部屋から飛び出した。

4 夜の闇と金の瞳？

凧沙はすかつり暗くなった自宅への道を、一人とぼとぼと歩いていた。

（どうしょ……。逃げてきちゃった・・・）

ティバのせいだとはいえ、自分がやったことに変わりはない。凧沙は自分の手の中にある笛を握りしめる。

（月曜日、ちゃんと返さない・・・）

今返しに行ってもいいのだが、そんな勇氣自分にあるはずがない。（夕理くん、大丈夫かな・・・）

辺りはすっかり夜の闇に包まれていた。ただ、それぞれの家庭から漏れる光が遠くの方に見えているだけ。凧沙はその暗闇に不気味さを覚えて、自然と歩調を速める。

その時、凧沙の手に何か冷たいものが触れた。ビクリとして振り返ると、そこにはティバが立っていた。

「ティ・・・」

凧沙は口を開こうとして、すぐその口を閉ざす。ティバが、あまりにも悲しそうな表情で凧沙を見上げていたからだ。

「ごめんね・・・凧沙」

ティバはひんやりとした弱々しいその手で、凧沙の手を握りしめながら今にも消えてしまいそうな声で呟く。

「・・・」

次の瞬間、後ろの襟をつかまれ乱暴に後方に引きよせられた。そしてほぼ同時に凧沙の手から笛が抜き取られる。

「-っ・・・」

「お前が仲村風沙か」

「-!!」

風沙はそこにいた見覚えのある顔とその声に思わず目を見開く。
不気味な笑みを浮かべる彼女は、間違いなく友達の美春だ。

「これが俺たちの求め続けていた“ハーメルンの笛”・・・よくやつたぞ。ティバ・・・これで俺たちが“光を受け入れる体”を手に入れる日も近い」

風沙は美春の口から発せられる信じがたい言葉に思わずその口を開く。

「美春・・・何言ってるの？」

そしてその瞳と眼が合い、息を飲む。今の美春の瞳は、この世のものとは思えない美しい金色に輝いていた。

「美春・・・？そんな奴は知らんな」

そう言つと、片手に持っていた笛を空中に投げ、数回まわったところを再び手に取った。そして再び口元に不気味な笑みを浮かべる。
「お前の事はティバに聞いて知っている。お前も本当に運の悪い奴だよ。俺の仲間に入られちゃったんだからな」

「-・・・」

すると、静かに今までの様子を見ていたティバが口を開いた。

「ルシウス。私は仲間じゃない。ただ協力しているだけでしょ」

「ああ、そうだったな。昔からの付き合いだからつい忘れちゃったよ」

美春・・・ルシウスは、ティバをからかうかのようにそう言う。

風沙はティバの視線をとらえようとしたが、ティバは風沙を見ようとせず、ただ自分の前の方をじっと見つめているだけだ。

「行くぞ。ティバ」

「・・・」

そう言つと、ルシウスは風沙に背を向けて歩き出した。当り前の

ようにその後にはティバも続く。

「待つ……！」

その時、強い光が風沙の顔を照らした。そして眩しさのあまり、目を反射的に閉じる。そして少しの間の後、何か重たいものがコンクリートの地面に落ちる音がした。

「………？」

目を開け、落ちた物を手にとってみると、それは懐中電灯だった。

（何でこんな物が……）

「あれ？何で風沙がここにいるの？」

「……！」

声の主を懐中電灯で照らしてみると、そこには先ほどの面影はすっかり消えた、いつもの美春がいた。

「ちょ……風沙！眩しいよ！」

「ごつごめん……」

風沙は慌てて光を美春の顔から逸らす。

「部活で先生に練習みてもらってたら、こんなに遅くなっちゃった」

「………そうなんだ」

風沙はそう答えながら、こっそりと美春の瞳を観察する。その色は金色ではなく、いつもの黒色だ。

「風沙……どうしたの？私の顔に何か付いてる？」

「な……何でもない……」

「……あれ？なんだろ。これ？」

美春はそう言うと、片手に持っていた笛を不思議そうに見つめた。

「あつ………！」

「この笛風沙のなの？何で私が持つてるんだろ」

風沙の反応に気づいてか美春はそう言うと、風沙に笛を差し出した。風沙は戸惑いながらもそれを素直に受け取る。

「ありがと……」

「どういたしまして！じゃ私、もう遅いし帰るね。風沙も気をつけ

て帰ってねー」

そして美春は、凧沙に背を向け夜の闇に消えていった。

「……………」

凧沙は美春の背中を複雑な気持ちで見送ると、片手に笛、もう一方の手には懐中電灯を持ち家路を急いだ。

凧沙は自室へ戻ると、笛を鞆にしまい込んだ。

（月曜日、ちゃんと返さないと・・・）

そして机の上に置いておいた、懐中電灯に目が止まる。

（そういえば・・・この懐中電灯誰のだろう？）

凧沙はそれを手に取ると、よくよく観察してみた。しかし名前らしきものはどこにも見当たらない。

何となくだがこの懐中電灯が凧沙を救ってくれた・・・そんな気がした。持ち主の顔を見ることはできなかったが、凧沙はこの懐中電灯の持ち主に少しでも感謝した。

夕斗はその日の夜、暗い天井を見つめながら考えた。いつもその暗闇に浮かんでくるのは兄貴の顔だ。そして次に夕斗の心を支配するのは、強い憎しみと怒り。それはあの時から決して消えることはない。

（凧沙の奴・・・いつまであの死神といやがるんだ？）

無理やりにも死神と凧沙を引きはがしてやろうと夕斗は思った。
……………それには大きな理由がある。死神が凧沙にとりついた

まま封印すると、風沙の魂まで封印しかねないからだ。それに、今日あの大切な笛を風沙・いや、死神に取られてしまった。

（すぐにでも風沙から取り返さないとな・・・）

「困りましたね」

突然、左手側から発せられた声に振り返ると、そこには足を組んで、わざとらしく人差し指を顎に当てながら座っているコーガンドの姿があつた。

タ斗はそんなコーガンドを見て一瞬、顔をしかめるが、その場で起き上がりあぐらをかく。

「すぐにでもあんたの笛は俺が取り返して・・・」

「私が言っているのはその事ではありませんよ？」

「!？」

するとコーガンドは軽くため息をついた。

「私の笛はタ斗がいずれ取り返してくればよいだけの話です。私が心配しているのは“笛を狙ってくる者”の事ですよ」

タ斗はその言葉により一層顔をしかめる。

「誰だ・・・そいつって」

次の瞬間、コーガンドの表情がかすかに歪んだ。

「黒い翼と金色の瞳を持つ者・・・“ルビデ”という種族です」

「ルビデ？」

「はい。彼らは私が生きていた時代から・・・いや、そのずっと前からこの地球に存在しています」

「・・・で、なんでそいつらはハーメルンの笛を狙ってるんだよ？」

コーガンドは片手の指で自分の帽子をくるくると回しながらそれに答える。

「彼らが狙っているのは笛ではありません。・・・笛の中に眠っている子供たちの魂です」

「・・・!」

「彼らの命の源・・・つまり食糧ですね。それは“人間の魂”なんで

すよ。だから彼らにとって、百以上の若い魂が眠っているハーメルンの笛はごちそう以外の何でもありません」

そこまで言うと、コーガンドの指から帽子がポーンと離れた。そしてそれは夕斗の顔に見事にぶつかる。

「おっと。すみませんね。夕斗」

「・・・」

夕斗は黙って帽子を手にとると、それをコーガンドに投げ返した。
「・・・で、コーガンドはどうやって、そいつらからその笛を守ってきたんだ？」

コーガンドは帽子を受け取ると、それをいつものように目深に被る。

「簡単な事ですよ・・・彼らの体は“光”を受け付けません。つまり、“闇”を避ければいいのです」

「・・・」

「そうですね・・・ものの時は・・・あの・・・何でしたっけ・・・そう・・・懐中電灯を使っても効果的ですよ」

「・・・懐中電灯？」

「はい・・・私の知らない間に、あんな便利な物が発明されたんですね」

そう言うとコーガンドはいつものように微笑んだ。

そして月曜日。風沙はいつもの時間に家を出た。

（今日、笛を夕斗に返しちゃえばもう変な事は起こらないよね・・・？）

土曜日の帰りの出来事は、この“ハーメルンの笛”が原因で起こった。だからこの笛を元の場所に返してしまえば安全なはずだ・・・

少なくとも自分は。

「闇に気をつけて・・・」

突然背後から声がした。凧沙はドキリとして後ろを振り返る。そこにはウェブのかかった金髪の髪を二つに結わえた少女が立っていた。

「アニタ・・・？」

アニタはその緑がかった大きな瞳で凧沙を見上げると、再び口を開く。

「・・・闇はルビデを呼び覚ます」

凧沙は大きく目を見開き、アニタを見下ろした。“ルビデ”とはいったい何なのだろう。それに・・・闇に気をつけて・・・？

「光はルビデを退ける・・・」

今度は凧沙の正面の方から声がした。向き直ると、そこにはアニタと同じ顔の男の子ーレイタが立っていた。

「光があればあいつらは存在できない」

凧沙はその言葉に再び目を見開いた。光はルビデを退ける・・・？

「・・・それってどういう・・・？」

しかし次の瞬間、凧沙は口をつぐむ。二人とも幻のように姿を消してしまったからだ。

ブーブーブー・・・

「！」

授業中、机に入れておいた凧沙の携帯のバイブが鳴った。皆に背を向けて、黒板に一生懸命文字を並べている先生を確認すると、凧沙は机の下でこっそり携帯を開く。

メールの送り主は美春だった。内容はこうだ。

・・・

暇だよー。この先生の授業退屈なんだよね；
なぎさあゝ！何か楽しい話ない！？

・
・
・

凧沙はメールの文章を一通り読むと、携帯をパタリと閉じる。楽しい話といっても何も思いつかなかったからだ。

（というか・・最近嫌なことしか起こってないような気が・・）
貧血になって倒れたり、美春に突然襲われたり・・それにあの時、ティバの様子も変だった。いったいティバは何を隠しているのだろう。

そしてその時の美春は、見た目は確かに美春だったが・・美春ではなかった。確かティバは、彼女のことを“ルシウス”と読んでいたような気がする。

そのルシウスは、アニタとレイタが今朝言っていた“ルビデ”と関係があるのだろうか。

（それにタ斗にあの笛を返さないといけないし・・隣のクラスだから行きづらい・・）

凧沙は再び携帯を開くと、美春にメールを打つ。

・
・
・

お願いがあるんだケド・・。

隣のクラスの五十嵐タ斗って知ってる？

そいつに返したいものがあるから、昼休み一緒にきて！

・
・
・

凧沙はそこまでメールを打つと、送信のボタンを押した。

すると、すぐにバイブが鳴り返事が来た。そこには「もちろん行く！」と書かれていた。

「へえー風沙って五十嵐くんと知り合いだったんだ！」

昼食を終え、隣のクラス3・8の前まで来ると、美春が驚いたようにその声を上げる。

「まあね・・・」

風沙は適当に言葉を返すと、教室の廊下側に付いている窓から中を覗き込んだ。

「風沙が男子と友達なんて珍しいね？」

「・・・別に友達ってわけじゃ・・・」

風沙は口ごもるように言いながら、教室の中に視線を走らせる。しかし、どこを探しても夕斗の姿が見当たらない。その時、急に肩をバシッと叩かれた。

反射的に振り返ると、そこには夕斗の顔があった。

「やあーと・・・返しにきたな！」

夕斗は顔にわざとらしい笑みを浮かべながら言った。

「・・・うん」

風沙はそう答えるのと同時に、今まで張りつめていた何かが一気に緩んだような気がした。

・・・やつとこの“変な笛”を返すことができる。それに夕斗は怒ってない？らしい。風沙は片手に持っていた紙袋に入っている笛に素早く手を伸ばした。

「五十嵐くん、ごめんね！風沙が迷惑かけちゃって！」

隣に立っていた美春が妙にテンションの高い声でそう言う。

「大丈夫。風沙がきちんと返してさえくれればね」

夕斗はたんたんとした口調で言った。

最後の言葉に刺があるのは気のせいだろうか。風沙は内心で毒づきながら、夕斗に古い横笛を差し出した。

「は・・・」

「こらー！！五十嵐ー！！」

突然の怒鳴り声に振り返ると、そこには先生が立っていた。確か、熱血指導で有名な八組の担任の先生だ。

「先生！！何か用ですか！！」

夕斗は早口でそれに答える。どうやら今の状況を早く終わりにしたいらしい。

「何ですか！！じゃないだろ！！呼び出されていてすっぱかすとはどういう事だ！！」

先生は顔をほのかに赤らめながら、再びそう叫ぶ。

風沙は夕斗の顔を横目でうかがった。その顔には、明らかにヤバいという表情が浮かんでいる。

風沙は内心で深い溜息をついた。

「行けば・・・何か先生怒ってるみたいだし」

風沙はそう言つと、笛をもとの紙袋に戻す。

「・・・悪い！じゃ、放課後、教室で待つてろよ・・・逃げたら怒るかなー！！」

夕斗はビシッと人差し指を風沙に向けると、先生の後について去って行った。

風沙はその遠ざかっていく背中を見て再び溜息を洩らす。午前と同じ不安を抱えたまま、午後を過ごすことが今確定した。

風沙は長い午後の時間を過ごし、そして放課後、教室で本を読みながら夕斗を待つことにした。

今日の部活動開始時間は、四時四十分。今は三時三十分なので、まだ一時間以上ある。教室内には、風沙以外におしゃべりを楽しんでいる生徒が何人かいるだけで、他には誰もいない。

風沙は本から視線を外し、ふと窓の外を見た。まだ外は明るかった。もうすぐ夏になるのだから、当たり前なのだが。

でも時期に夜はやって来る・闇は必ず凧沙を包み込む。凧沙は幼い頃から、“闇”というものが苦手だった。何も見えない闇は、恐ろしいものでしかなかった。

そして今の凧沙は夜になると、あの時の金色の瞳を思い出してしまふ。あの金色の瞳の本当の持ち主は、いったい誰なのだろう。

そして次の瞬間、凧沙は立ち上がった。

片手には、ハーメルンの笛が入っている紙袋がしっかりと握りしめられている。

凧沙は校舎を出ると、学校の裏にある雑木林までやって来た。そしてしばらく進んだところで歩みを止める。

「ティバ・・・今度は何をするつもり？こんな所まで私を連れて来て」

凧沙は前を見据えて、しっかりとした口調でそう言った。

「やつぽー凧沙ー!!」

すると、凧沙の視線の先にティバが現れた。その顔には、あの時の悲しい雰囲気は消えて、満面の笑みが浮かんでいる。

「凧沙にはちよつと用事があつてここに来てもらったの」

「・・・どんな？」

凧沙はティバの黒い瞳をしっかりととらえて、静かに言った。

「・・・大丈夫。私は凧沙が大好きだから、何も悪い事しないよ?」

ティバは凧沙の冷たい言葉にも動じずそう言つと、いつものように腕を凧沙の腕に絡めてきた。

「!!!!!!」

凧沙は反射的にティバの腕を振り払おうとした・・・が、できなかった。ティバが以前のように親しく接してくれた事に、少しの嬉しさを感じてしまったかもしれない。

たとえそれが、風沙を騙すためだとしても。

「良かったあゝ私、風沙に嫌われたら、どうしようかと思っていたの！」

「・・・」

風沙は黙って俯く。そして片手に持っていた紙袋を、ティバの視線まで持ってきた。

「ティバの本当の目的はこれなんでしょ？」

そしてしばらくの沈黙の後、ティバはクスリと笑う。

「うん。そーだよ・・・でも風沙の事も同じくらい私にとって必要な存在なんだー」

そして次の瞬間、ティバの手に大きな鉛色の鎌が現れた。そしてそれをゆっくりと風沙の頭上まで持つてると、それを勢いよく振り下ろした。

（うつ・・・）

風沙は一瞬の目まいと吐き気を感じたかと思うと、その場に崩れるようにして倒れる。そして意識を失った。

（いないし！！）

教室を覗いた夕斗は愕然とした。そこに居るはずの風沙の姿がなかったのだ。

「おい！仲村風沙って何処に行ったか知ってるか？」

教室の後ろの方で、話をしている何人かの生徒に入口の方からそう声をかける。

「んゝ。さっきまで机で読書してたけど、急に何か持って出て行ったぞ？なあ？」

「ああ。そうだな」

「ありがとな！」

タ斗はそう言い終わるか終わらないかのうちに走り出した。

風沙が教室から消えたのはおそらく死神のせいだろう。もう風沙は死神の操り人形にすぎない。タ斗はそう思った。

（何でそんな死神と一緒にいたがるんだよ・・・！）

そして次の瞬間、何かに思い切りぶつかった。

「コーガンド・・・！」

そこにはとんがり帽子を深く被り、長いローブを羽織った男ーコーガンドの姿があった。コーガンドはタ斗の顔を見下ろすと、微笑む。

タ斗はそんなコーガンドに苛立ちを覚えた。・・・こっちは今、必死なのに。

「今、急いでるんだよ！！！」

「まあ、そんなに慌てないください。それに彼女と・・・私の笛が何処に行ったか見当は付いているのですか？」

「それはっ・・・」

タ斗は口をつぐんだ。焦っていて何も考えていなかったのだ。

「分かりました・・・それでは私が案内しましょう。私には笛のある位置が自然と分かりますからね」

するとコーガンドは、背をむけスタスタと歩きだす。そして何かを思い出したかのように、立ち止まると肩越しに振り返り言った。

「それと一応言っておきますが、ティ・・・あの子と友達の彼女の生命力はもう限界ですよ？早くしないと彼女はルビデたちの餌食になってしまうでしょうね」

「！！・・・どういうことだよ？」

「・・・前にも言ったと思いますが、ルビデが求めているのは私の笛に眠っている子供たちの魂です。そしてそれらを手に入れば、彼らは同時に“光を受け入れる体”を手にする事ができるのですよ」

タ斗はその言葉に大きく目を見開いた。

風沙はひんやりとした空気に目を覚ました。

（うそっ・・・）

辺りはとつぷりと夜の闇に沈んでしまっていた。きっとこの場所が雑木林の中だからだろう、少しはあっていいはずの光が全く見当たらない。

そして自分の体までもが、暗闇に染まってしまったかのように認識することができなかつた。

（怖い・・・）

風沙はその場所から動けなくなっていた。一歩でも進んでしまうと、この闇にすべてを囚われてしまうように感じたからだ。

「風沙」

突然、その闇の中から声が聞こえてきた。その可愛い声は、間違いなくティバのものだ。

「私に近づかないで」

風沙はできるだけ力強い声でそう言った。ティバは自分を今の状況に陥れるためにここへ連れて来たのだ。今のティバを信用してはいけない・・・風沙は自分に必死にそう言い聞かせた。

「風沙・・・私の事嫌いになっちゃったの？」

「・・・」

風沙は口をつぐむ。嫌いになったわけじゃない。ただ・・・今のティバは何かを隠している。

風沙の知らない“何か”を・・・それが風沙にとって怖いものであるように思えてならないのだ。すると突然、前から腕を回され優しく抱きしめられた。

「！！！！」

そして耳元で声がした。

「風沙……。私、風沙のことが大好きだよ。あの海に行った日から私はずっと風沙と一緒にいたんだ……。」

「……。――!」

風沙の脳裏に合宿での出来事がよみがえった。あの時の“もう一人の自分”は確かにおかしかった。自分の体が勝手に動いたのも・・・ティバのせいだったのだ。

「何で……。ティバは私を選んだの……。?」

すると、ティバの体がわずかに震えた。

「……。それは……。」

そこまで言うと、ティバは風沙からそっと離れ立ち上がった。

「……。?」

その時、風沙の目の前に背景より黒い何かが舞い落ちた。風沙はドキリとしてそれを手に取る。

風沙は今、自分の手の中にある物を知っている。

・・・だってこれはあの時見た光景と同じだ。木組みの家が建ち並び通りに、夜の闇。うずくまっている自分。

――。それは羽だった。真っ黒な。

そして気づくと、目の前に大柄な男が立っていた。彼は闇のような黒を身にまとい、そしてその背中からは悪魔のような漆黒の翼が生えている。

そしてその金色に輝く瞳を歪ませて不気味な笑みを浮かべた。

「これでお前と会うのは二度目だな」

「……。――」

風沙は彼の金色の瞳に見覚えがあった。彼はあの日の夜、美春の体にとり付いていた。そしてティバが彼のことを“ルシウス”と呼んでいたことを思い出した。

「あら？彼女には私たちが見えるのね？普通の人間は見えないはずなのに」

見上げると、ちょうど風沙が座り込んでいる真上の枝に若い女性

が足を組んで座っていた。彼女の背にも、ルシウスと同じように黒い翼が生えている。

「おそらく、ティバ・俺たちの仲間に関わりすぎたせいだろうよ。ティバはこいつを気に入って、いつでも一緒にいたからな」

「へえ……。そうなの。面白そうね」

そう言っていると、彼女は風沙の脇にフワリと着地した。

「どう？ やっぱり私たちのこと、怖い？」

風沙は震える体を必死に抑えた。視線だけを動かしてみても、人間ではない者の雰囲気こそこらじゅうに感じる。

「いったい何が目的なの……？」

風沙は声を絞り出すようにして、そう呟いた。するとルシウスは、風沙の隣の紙袋に手を伸ばす。そしてその中から古い横笛を取り出した。

「俺達の目的はこの“ハーメルンの笛”を使って光を受け入れる体を手にする事だ」

風沙は“光を受け入れる体”という言葉に聴き覚えがあった。いったいそれはどんな意味なのだろう。

「俺達ルビデは生まれたから今まで光というものを知らずに生きてきた。俺達のからだがその光という奴を受け入れなかったせいだな。でも最近気づいたんだよ。お前たち人間の体を手に入れれば、光の中でも存在できるとな。これで飽き飽きしていた闇と違った世界を生きていくことができるというわけだ……」

「……」

勝ち誇ったような笑みを浮かべ、ルシウスは言葉を続ける。

「しかし、自分自身の魂だけでは人間を完全に乗っ取ることはできない。そこで必要になるのはこの笛に眠っている130の魂だ」

そしてルシウスは、より一層不気味な笑みを浮かべた。

「これらの魂を食いつくせば何もかも俺の思い通りになる」

その時風沙はハツとした。すぐにここから逃げ出さなくては。今

自分がやばい状況にあるのは確かだ。

(・・・！！！)

風沙は愕然とした・・・体に力が入らない。全身の力が抜けおちてしまったように自分の体はとても重く、少しも動かすことができなかった。

「残念だったな。もうお前の生命力はほとんど残っていない。ティバが食事として食べていたお陰でな・・・それにお前に逃げられちゃあ、俺も困る」

「・・・・・・？」

「この笛に眠っている130の魂・・・その130個目はお前なんだから」

「！！！」

風沙の心臓が一気に跳ね上がった。

「お前には悪いがティバの代わりになつてもらう。ティバとはある約束をした・・・それにティバは今も俺達の仲間と同然だしな」

その言葉に風沙の心臓の鼓動がさらに早くなる。そしてそれと同時に嫌な汗がどつと噴き出した。

「何も心配することはない。お前の体は、俺達の誰かが大切に使うてくれるだろうよ」

「|・・・」

風沙は何も言わずに、ルシウスの隣に佇んでいるティバに視線を走らせた。

「・・・ティバ・・・ずっと私を騙していたの？」

「ごめんね。風沙」

ティバは顔色一つ変えずにそう呟いた。

「私は・・・このために今まで生きてきたの」

「・・・」

「だから風沙のために諦めることはできない」

そして次の瞬間、ルシウスの持っていたハーメルンの笛が青白い光を出して輝き出した。

「さよならだ・・・仲村風沙」

ルシウスがそう言うのと同時に、その青白い光はより一層強くなる。そして気づいた。自分の体もその光に同調するかのように青白く輝いていることに。

「風沙!!」

突然、聞き覚えのある声がその場に響き渡った。

「こんなところで何やってんだよ!!」

視線を走らせると、ルシウスごしに息を切らしながら立っている夕斗の姿があった。

「ゆうとっ・・・!」

風沙はとっさにそう叫ぶ。

「ティバ・・・やれ」

ルシウスがそう低く呟くのと同時に、ティバの片手に大きな鉛色の鎌が現れた。

「分かってる・・・」

ティバはそう呟くと夕斗の方へ素早く移動し、鎌を振り下ろした。しかしそれは虚しくも空中を切り裂く。

そして夕斗はティバの背後に素早く回り込み、その小さな背中を蹴り飛ばした。ティバは成すすべもなく木に叩きつけられ、その場に倒れ込む。

「風沙! 笛、持ってるんだろ!? 早くこっち来い!」

夕斗は怒鳴るようにそう叫んだ。

「え・・・」

風沙は夕斗の言葉に違和感を覚えた。今、そのハーメルンの笛は風沙の目の前に立っているルシウスが持っている。

・・・夕斗にはルシウスが見えていないのだろうか。

すると、ルシウスが静かに口を開いた。

「言っておくが、俺達は普通の人間には見えない。まあ、お前は俺たちに関わりすぎたから特別だ」

「・・・」

すると、凧沙の不自然さに気づいた夕斗がゆっくりとこちらへ歩み寄ってきた。

「もしかして・・・“ルビデ”なのか？そこにルビデがいるのか！？」
「……………そう・・・ここにいます・・・」

凧沙はルシウスをできるだけ見ないようにしてそう恐る恐る呟く。その時、凧沙は驚きのあまり目を見開いた。今、まさにティバが夕斗の背後で鎌を振り下ろそうとしていたのだ。

「……………」

そして次の瞬間、ティバの腕が誰かにつかまれた。暗闇でよく見えなかったが、帽子を被った男の人のようだ。

「やめなさい」

彼は低い声でそう呟いた。

「コーガンド様……………」

その声と顔を確認した途端、みるみるティバの表情が穏やかになる。だが、腕を掴まれているせいで完全に振り向くことができない。
(コーガンドって確か……………)

その名は凧沙が夢の中で叫んでいた名前だ。いや、凧沙ではなく他の誰かが。

(もしかして私が夢で見ていたのって……………)

そして次の瞬間、ルシウスの持っていた笛がブルブルと震えだした。コーガンドが手を前にだすと、それは彼の手に吸い込まれるようにしてその中に収まる。

「私の笛は返していただきますよ。大切な子供たちがこの中に眠っていますから」

すると、ルシウスは不気味な笑みを浮かべた。

「笛使い……………やはりこの近くにいたか。それとも何……………少しはお前も、ティバの事を心配してるのか？」

途端にティバの表情が凍りつく。

「コーガンドさ……………」

「私はただ単に夕斗たちの事が心配なだけです」

「・・・ほう、そうか」

ルシウスはより一層、皮肉のこもった笑みを浮かべた。

「ティバ。今回は引き返すぞ」

「|・・・」

ティバはコーガンドの手を払いのける。そして何も言わずにその場から姿を消した。続いてルシウスも背景の闇にとけるようにして姿を消す。

コーガンドは二人を静かに見送ると、笛を夕斗にしっかりと手渡した。

「夕斗、今度はしっかりと持っていてくださいよ」

「分かってるよ・・・」

そしてコーガンドもその場から溶けるようにして姿を消した。

5 夕暮れの街の記憶？

「いいか。風沙。絶対にもうあの死神とはかわり合うなよ」

夕斗は風沙の家の前の道まで来ると、（もう遅かったので途中で送ってくれたのだ）言い聞かせるようにしてそう言った。

「・・・何で？」

風沙のその言葉に夕斗の表情がみるみる怒りへと染まっていく。

「何でってあいつは死・・・」

「ティバ泣いてた！！」

風沙は夕斗の言葉をさえぎるようにして叫ぶ。こんな自分らしくないと思っていても、自分の口から出てくる言葉は止められない。「姿を消す一瞬、ティバ泣いてた。ティバは死神じゃない・・・普通の女の子だよ」

「・・・」

それでも夕斗は怒りの表情を動かそうとしない。風沙は思わず夕斗から視線をそらした。

「・・・あいつはお前を裏切った・・・そうだろ！？」

「分かってる」

風沙は視線をそらしたまま、それだけ答えた。ティバのせいで危険な目にあったことは十分すぎるくらいに分かっている。

でもティバの涙を見たら、そんな事どうでもよくなってしまった。きつとティバは苦しんでいるのだ。誰にも言えない心の闇を抱えているに違いない。

「俺には分からない。あいつはただの死神だ」

「ティバは死神じゃない」

「・・・っ！！」

突然、夕斗は風沙の襟元を掴んで乱暴に引き寄せる。

「お前は何も分かってない！！あいつは・・・あの死神は俺の兄貴を殺したんだ！！！！」

夕斗は叫ぶように言うと、風沙を乱暴に突き放し、夜の闇の中へ走り去って行った。

最悪の気分で玄関の扉を開けると、すぐに母が駆け寄ってきた。

「風沙、遅かったじゃない・・・どうしたのっ？その汚れ！」

母は制服にこびりついた泥を見るなりそう声をあげる。

「何でもないから」

風沙は流すようにそう言うと、母を素通りして自室への階段を上がる。

「夕ご飯、食べるの待ってたんだから早くしてよ」

風沙はその声を背中で受け止めると、自室のドアを開け、そのままベッドに倒れこむ。

（疲れた・・・）

風沙は自室へ行くと、そのままベッドへ倒れ込んだ。そして白い天井をじつと見つめる。

・・・あんな取り乱した夕斗、初めて見た。いつも怒っているような気がするが、今回のそれは以上だろう。

“死神は兄貴を殺した”夕斗が言っていたその言葉が頭にこびり付いて離れない。そしてそれは前に夕理が言っていた、“兄さんは死神に殺された”という言葉とかぶっているように感じて仕方がなかった。

それでも風沙はティバが誰かを殺すなんてこと、信じられない。いや、信じたくない。

それは風沙の祈りにも近かった。

「・・・ひつく・・・ひつく・・・」

「・・・？」

凧沙はだれかの声でふと目を覚ました。

周りはほのかに明るい。といっても、時計を見ると約午前二時。

凧沙はいつも小さな電球をつけて寝ているのだ。

（今、誰か泣いてた・・・？）

この部屋にいるのは、今凧沙一人だけのはずだ。凧沙はゆつくりとベッドから体を起こす。

（いったい誰が・・・）

よく目を凝らして見ると、凧沙の勉強机の前に置いてある椅子に、誰かが腰かけていた。

「私・・・まだ死にたくない・・・」

「僕もだ・・・」

どうやらそこにいるのは、一人だけではなさそうだ。それに凧沙はこの二つの声に聴き覚えがあった。

「・・・アニタ？レイタ？」

「・・・凧沙にお願いがあるの」

女の子のアニタが呟くようにそう言った。そして凧沙のベッドに上がりこむと、凧沙の手を両手で握りしめる。その手はティバと同様、ひんやりと冷たかった。

「私たちを・・・笛に眠っている魂達をルビデから守ってほしい・・・」

私たちの望みはただ安らかに眠ること・・・」

「・・・」

凧沙はアニタの緑がかった瞳をじつと見つめる。その瞳からは今までと同様、何の感情も読み取ることはできなかったが、そこにはかすかに涙が浮かんでいる。

しかし凧沙はアニタの手を優しく振りほどいた。

「・・・分からない・・・」

アニタの表情がかすかに動いた。

「何で・・・だ？・・・何で僕たちを助けてくれないんだ？」

今度はアニタの後方に立っていたレイタがそう呟く。風沙はレイタの言葉にドキリとしたが、はつきりとした口調で言った。

「私はティバの事が心配なの」

今度は二人の表情が大きく動くのが分かった。

・・・―悲しみへと。

「私は・・・ティバが何を考えているか知りたいの。そしてどうすればティバを救えるのかも」

アニタとレイタは二人でお互いの顔を確認しあうと、ゆっくりと口を開いた。

「風沙がそこまでティバの事が心配なら、私たちでティバについて知っている限りの事を教えてあげる・・・」

アニタは悲しそうにそう呟いた。

ここはハーメルンの町。

木組みの家が並んだ石畳の通りを、一人の赤毛の少女がその髪を風になびかせながら走っている。そして彼女はある家の前まで来ると、その歩みを止めた。

「こんにちハー。アニタ、レイタ、遊ぼうー!!」

彼女は元気にそう言いながら、玄関の扉を押し開ける。

「あら。ティバちゃん。いらっしやい」

リビングで編み物をしていた、アニタとレイタの母が、赤毛の少女―ティバを笑顔で迎え入れた。

「あ。おばさん、こんにちハ。これ、今朝市場で買った物なんですけど皆で食べてくださいー!!」

ティバはそう言うと、りんごの入った紙袋を手渡した。

「いつもありがとね・・・アニタとレイタなら二階にいるわよ」
「はい！」

ティバはそう言うと、元気に階段を駆け上がった。

「ティバ、また来たの？」

金髪と緑の目を持つ少女ーアニタは部屋に元気よく入ってきたティバを見て、ため息混じりにそう言った。

「別にいいでしょー？だって家に一人でいても暇なんだもん」
すると、ベッドに横になって本を読んでいたアニタとそっくりな男の子ーレイタが口を開いた。

「別にいいんじゃない。どうせ僕らも暇だったんだしさ」

「アニタとレイタも暇だったんだ！それなら良かった！」

ティバはそう言うと、アニタの腕を掴み、部屋の真ん中にある小さいテーブルの前に座らせた。その隣にティバも腰を下ろす。

「ね？アニタ。今度はどんな絵を描いたの？」

ティバは頬杖をつきながらアニタに問いかける。

「別に・・・いつもと同じよ」

アニタはそう答えながらティバにスケッチブックを手渡した。ティバはそれを嬉しそうに受け取ると、パラパラと一枚一枚めくる。

その微笑んでいる横顔はとても可愛らしい。アニタもそんなティバを見て、いつの間にか微笑んでいた。

「やっぱりアニタは絵上手だよねー！将来、絶対画家とかになれるってー！」

「そんな事ないわよ・・・」

アニタはそう言うと、顔を伏せる。確かに小さい頃は画家という職業に憧れて、それを目指したこともあった。しかし今では“それは無理”と決め付けてしまっている自分がここにいる。

ティバはそんなアニタを見ると、突然立ち上がった。

「そっだー！！ね？アニタ、レイタ、街に行こう！」

「え？」

「街には楽しい事がたくさんあるんだよ」

ティバはそう言っていると、満面の笑みでアニタに手を差し伸べる。

「・・・そうね」

アニタは少し躊躇いながらそう答えると、ティバの手を借り立ち上がった。室内で遊ぶことの多いアニタにとって、街に出かけることはほとんどなかったのだ。

「僕は行かないよ」

突然レイタが口を開いた。

「街へいくより、ここで本を読んでたほうが楽しそうだし」

するとティバは、レイタの元へ近づき、その腕を引っ張った。

「だーめ。レイタも行くの。だって二人で行くより、三人で行ったほうが楽しいに決まってるでしょ？」

そう言っていると、ティバはレイタを無理やりベッドから起こし、アニタの隣まで彼を連れてくる。

「よしっ！！じゃあ、出発っ！！」

ティバはそう楽しそうに言っていると、階段を駆け降りた。その後にしぶしぶレイタも続く。

アニタはやっぱりそんなティバを見ていつの間にか微笑んでしまう。そしてそんな自分に気づいて、時々自分自身に驚く。

アニタはティバの事が大好きなのだ。

♪♪♪

ティバは街へ向かう途中、歌を口ずさみ始めた。アニタはこの曲を知っている。ティバが家に遊びに来た時、よく歌っていた曲だ。しかし、アニタはこの曲の歌詞をすべて知っているわけではない。

ティバの声が小さすぎて、聞きとりたくても聞き取れなかったのだ。ただ分かることは、その曲はどことなく寂しい雰囲気をもっていることだけだ。

「ティバがいつも歌っているその曲はどんな曲なの？」

アニタが尋ねると、ティバは決まって

「私の一番のお気に入り曲なの」

と笑顔で返すだけで、その曲のすべてをアニタに教えてくれることはなかった。

そして時はたち、夕方。

ティバとアニタとレイタは三人肩を並べ、アニタとレイタの家への道を歩いていった。ティバとアニタは二人でお揃いのぬいぐるみを買った。そうやらレイタは（手に持っている紙袋の形からして）本を買ったらしい。

「どう？二人とも楽しかった？」

ティバは笑顔でアニタとレイタに問いかける。

「ええ。楽しかったわ」

アニタは微笑んでそう答えた。

「レイタは？」

「・・・まあまあかな」

レイタは表情を変えずに、そう呟いた。しかし、レイタの顔をいつも見ているアニタにとって、その顔は微笑んでいるように見えた。それに気づいてか気付かずか、ティバはレイタにも満面の笑みを返す。

そして三人の隣を何人かの青年が通り過ぎた。

「知ってるか？この街の噂」

「知ってる知ってる！夜になって街の明かりがすべて消えると、現

れる“悪魔”の事だろ？」

「そうそれ。それにその悪魔は人間の魂が大好物らしいぜ」

「こわっ！！」

アニタは、聞こえてきた青年たちの言葉にドキリとした。ティバも恐怖の入り混じった表情でアニタを見つめている。

「アニタ・そんな噂、聞いたことある？」

「いいえ・・・初めて聞いたわ・・・」

すると、そんな二人の様子を見ていたレイタが口を開いた。

「この前読んだ本に書いてあったんだけど、魂を食らう種族のことを“ルビデ”と呼ぶらしいよ。けどそれは神話や伝説上の生き物で、実際には存在しないけどね」

その言葉を聞くと、二人の顔はみるみる穏やかになる。

「なんだあーそれなら良かった。実際いたらどうしようかと思っちゃった！ねー？アニタ」

「・・・ええ。そうね」

アニタはこの時、心から安心した。よく考えれば分かることだ。

魂を食らう生き物、ましてや“ルビデ”なんて種族、この世に存在するはずがない。

・・・少なくともその時はそう思っていた。

「じゃーまたね。アニタ、レイタ」

ティバは家の前まで来ると、二人に手を振りながら元気にそう言った。

「またね」

「またな」

その時、ティバの動きがピタリと止まる。

「何か聞こえる・・・この曲って・・・」

ティバは呟くように言うと、突然走りだした。

「ティバ!？」

アニタはティバの突然の行動に戸惑いながらも、ティバの後に続き走り出す。

「……そうしないと、何となくだがティバに一生会えなくなってしまう、そう感じたからだ。」

「私はその後も、ティバの後を追い続けたわ。でも私の足では、ティバに追いつくことができなかったの」

アニタは寂しげにそう言うと、風沙の隣でうずくまるようにして座り込んだ。

「確かにあの時、あのメロディーが聞こえたんだよな」

レイタの声にアニタは顔を上げる。

「コーガンドが吹く音色が」

「……ええ」

「……それで、その後どうなったの？」

風沙は好奇心が抑えきれずに、二人にそう問いかけた。二人は再び顔を見合わせると、アニタは再び静かに口を開く。

「……その後、ティバは私たちの前から姿を消したの……。そしてティバが失踪してから数日後、またあのメロディーが聞こえてきたわ」

夕日が二人の部屋をオレンジ色に染め上げた。

そして今日もアニタは部屋の窓から夜になりかけている町を見下ろしている。その町並みからはいくら探してもティバの姿はない。

（ティバはどこに行ったのかしら・・・）

数日前まで必ずといっていいほどに聞こえてきた、階段を駆け上がる足音は最近めっきり聞こえない。

そしてかるく溜息をつくとき、窓を閉めるため、取っ手に手を伸ばした。

「アニタ、何か聞こえないか？」

突然、ベッドに仰向けに寝転がっていたレイタが口を開いた。

「え・・・」

そしてかすかに・・・しかしはつきりと聞こえた。

「レイタ・・・」

「アニタ。行くぞ！」

レイタはそう言うと、素早く起き上がり、階段を一目散に駆け降りた。その後アニタも続く。

（もしかしたら・・・この音色の先にティバがいるかもしれない・・・）

アニタは胸に微かな希望を抱きながら、必死になって音色の音源を目指した。

しかし、そこに待っていたのはティバではなかった。代わりに飛び込んできたのは、信じられない光景だ。

アニタとレイタが、笛の音を追ってたどり着いた場所――森の中の洞窟の前には、数えきれないほど多くの子供たちが集まってきていた。そしてその顔には見覚えがある。ここにいるのは皆、ハーメルンの町の子供たちだったのだ。

（皆、もしかして笛の音を聞きつけてここまでやって来たの・・・？）
「初めまして。皆さん」

聞き覚えのない男性の声に視線を走らせると、ちょうど洞窟の入り口付近に大きな帽子を被り、フードをはおった男が立っているのが見えた。

「こんにちは。私は“悪魔狩り”のコーガンドと申します」

その男——コーガンドは帽子を外し、軽く頭を下げながら丁寧に言う。

（悪魔狩り・・・？）

「私は悪魔の中でも、人間の魂を食らう種族“ルビデ”を狩ることを生業としています」

その言葉に子供たちの中にざわめきが起る。どうやらあの噂は町中に広まっていたらしい。

「ルビデなんて生き物、この世にいるわけねーだろー！」

恐怖に耐えきれなくなったのか、子供の中の一人が恐怖が入り混じったような声を上げた。すると、コーガンドの顔にかすかな笑みが浮かぶ。

「それはあなた達が何も知らないだけです」

『——！』

アニタは他の子供たちと同様、恐怖でいっぱいになった。

（あの噂は本当だったんだわ・・・）

「そこで今日、あなた達をここへ呼んだのには大きな理由があります」

アニタはその言葉にさらにドキリとした。

（——・・・呼んだ？）

「アニタ！」

突然名前を呼ばれ、振り返ると、少し離れた所でレイタが手まねきをしていた。

「はやくここから離れるぞっ」

レイタは小声でそう言うと、アニタに背を向け、足早に歩き出す。

「・・・ええ」

アニタも迷わずレイタの後に続く。明らかに今の状況は普通ではない。アニタもそう感じたからだ。

「待ちなさい」

「！！」

その声にアニタの背筋が凍りつく。そして歩みを止め、恐る恐る後ろを振り返った。そして、子供たちの視線の先にあるコーガンドの視線とぶつかった。

「命が惜しければ、ここを立ち去らないことです」

コーガンドは妙に落ち着いた声でそう言った。

「・・・」

アニタとレイタは二人で視線を交わすと、おとなしくコーガンドの言葉に従った。いや・・・従わざるをえなかった。

コーガンドは二人から視線を外すと、目の前にいる子供たちをゆっくりと見渡す。

「さて、これから皆さんにはこの洞窟に入ってもらいます」

そして背後にあった洞窟を指差した。

「・・・・・・？」

「今、皆さんの魂がルビデに狙われています・ルビデは魂の中でも若く、生命力で溢れている子供の魂を狙いますからね。だから私は皆さんをここへかくまっておきたいのです」

コーガンドは流すように言うと、子供達を洞窟の中へ導き始めた。子供たちは戸惑いながらも、そろそろとその中へ入っていく。

そして最後にアニタとレイタだけが外に取り残された。

「あんたの言葉に嘘はないよな？」

レイタは洞窟の前で歩みを止めると、疑いの入り混じった視線をコーガンドに向けながらそう言った。

「もちろんです。私を信じてこの中で待っていてください」

そう答えると、コーガンドは二人に向かって優しく微笑む。

レイタはその言葉を信じたらしく、他の子供たちと同様、洞窟の

奥の方へと消えていった。アニタはレイタの後に続こうとして歩みを止める。アニタにはさつきから、どうしても気になっていることがあったのだ。

「……それはティバだ。ティバはここにも姿をみせていない。

「あのっ……。ティバ・赤毛の髪に薄いグレーの瞳をもった女の子を知りませんか？」

アニタは意を決してコーガンドにそう尋ねた。コーガンドは少しだけ驚いたように目を見開くと、すぐに柔らかい声で言葉を返す。

「……彼女はまだここに姿をみせていませんか……でも心配いりません。すぐにここへ姿を現しますよ」

そして、アニタの肩に手を乗せ、優しく洞窟の中へ導いた。

アニタは彼の手の大きさにドキリとしたが、不思議と怖い感じはしなかった。反対に彼からは自分たちを思ってくれているという優しい感情がひしひしと伝わってくる。

そして、きつと彼ならティバと私を再び会わせてくれる、何となくがそう感じた。

「いいですか。朝日が上るまではここから決して出ないでください」
そう言い残すと、コーガンドは暗闇に染まった森の中へ姿を消した。

夜の闇の中、町の明かりとはほどはなれた暗い木の枝に、一人の少女が腰掛けている。そして彼女は、その漆黒の髪を微風になびかせながら何かの歌を口ずさむ。

しかしその歌声は、あまりにも弱々しく聞き取ることができない。
(風沙は私の事嫌いになっちゃったよね……)

黒髪の少女―ティバはその口の動きを止めると、町の明かりを見

つめながらそう思った。

・・・こんな自分嫌われて当たり前だ。だって私は風沙を裏切った。いや、裏切るために近づいた。

すべてはあの時悪魔と交わした約束のため。私はあの130人の粹からまんまと抜け出し、代わりにそこへ風沙を押し込んだのだ。

(・・・おなかすいた・・・)

ティバは木の枝から身軽に飛び降りると、丘の上の道に沿って歩き出した。すると、目の前に人影が現れた。その人は、携帯電話で楽しそうにお喋りに没頭している。

ティバは何のためらいも無く、手に現れた鉛色の鎌でその人の全身を切り裂いた。話し声はピタリと止まり、その人はティバの足元に崩れ落ちる。

《死神》

そんな単語がティバの頭の中に木霊した。

あの笛使いは私をそう呼んだ。間違っではないと思う。人の命を奪ったのだから、そう言われるのは当たり前だ。でもそれは悪いことだとは思わない。

だって何かを得るためには、何かの犠牲が必要になってしまうと思う。その犠牲を恐れていたのでは、大切なものは何も手に入らない。

その時突然、腕を力強く引つ張られた。

「……」

ティバはその力にされるがままに、丘の斜面の芝生の上に倒れこむ。すると、見慣れた金色の瞳と眼が合った。

「ティーバっ遊ぼうぜ！」

「シアン・・・急に引つ張らないでよー」

ティバは楽しそうに自分の瞳を覗き込む青年―シアンに向かって、困ったような笑みを浮かべる。

「だってさー。暇だったんだよー」

シアンはそう言うと、仰向けに寝転がった。ティバもシアンと同

じようにして体を上に向ける。

「何でさ、ティバはさ、いつも悲しそうな顔してるんだ？」

シアンは、夜空を見上げながらティバにそう問いかけた。

「・・・えー。私別に悲しい顔なんかしてないよー？」

ティバも夜空を見上げながらそれに答える。

シアンとは昔からの付き合いだ。昔といっても、出会ったのはティバが“死神”になってからだ。ティバは軽いため息をつく、再び夜空を仰いだ。そこには、数え切れないほどの星たちが、小さな光を出して輝いている。この空は、あの時の空と同じだった。

そしてそれと同時によみがえる情景は、夕日色に染まった町並み。・・・―そしてあの人が吹く笛の音だ。

ティバはいつの間にか、このハーメルンの町を見渡せる高台に来ていた。もうすっかり辺りはオレンジ色に染まり始めており、夜が近いことを知らせている。そして少し離れた所にあるベンチに、人が座っているのが見えた。

どうやらこの音を奏でているのは、その人のようだ。すると彼はティバの存在に気づいてか、指の動きを止め、肩越しにティバを振り返った。

「こんにちは。あなたは・・・この町の方ですか？」

彼ーコーガンドはそう言うと、ティバに向かって微笑む。

「あつ・・・はい」

ティバはコーガンドの笑顔にドキリとしたが、何とか彼の質問には答えることができた。

「あのつ。笛お上手ですね・・・何というか、私のお気に入りの曲に雰囲気がよく似ていて、ついついここまで来ちゃいました・・・」

ティバがもごもごと口ごもるように言うと、コーガンドは再び微

笑んだ。

「そうですか・それなら、もっとよく聞かせてあげますよ?どうぞ隣に座ってください」

コーガンドはそう言うのと、視線を再び前へ向けた。

「・・・」

ティバは内心でドキリとしながら、コーガンドの座っているベンチに近づき、隣に腰を下ろす。

「・・・私はコーガンドと申します。あなたのお名前は?」

「・・・ティバです」

すると、コーガンドは再び微笑んだ。

「ティバさんですか・あなたは私がこの町に来て最初の“出会い”ですね」

「・・・」

「では聞いてください。ティバさん」

コーガンドはそう言うのと、手に持っていた横笛で、再びメロディーを奏で始めた。ティバはその時、嬉しさでいっぱいになった。やっぱりそのメロディーは、自分のお気に入りの曲にそっくりだ。

そしてティバは、できるだけ小さな声で、彼のメロディーに合わせその歌を口ずさんだ。

「さて、ティバさん。日も落ちましたし・・・お帰りになってはどうですか」

コーガンドは夜景に染まった町並みを見下ろしながらそう言った。

「・・・いやです」

ティバは内心で悪いと思いつつも、はつきりと言った。すると、コーガンドは困ったように微笑む。

「お母さんやお父さんが心配してますよ？」

ティバは予想できた言葉にたんたんと言葉を並べる。

「……私に両親はいません。今は、親戚の家に家事の手伝いをする事を条件に置いてもらっているんです」

コーガンドの瞳がわずかに見開かれるのが分かった。それでもティバは気にせず言葉を続ける。

「それに……あの人は私の帰りが遅いからといって心配するような人じゃありません」

「……」

きつと優しい彼なら自分が望んでいる言葉を返してくれるだろう、そう思った……だが。

「だめです。今すぐ帰りなさい」

「……！」

「帰るべき場所があるなら、ちゃんとそこへ帰るべきだと思いますよ」

コーガンドはそう言う、その場で立ち上がる。同時にティバ心に寂しさと不安が溢れだした。

「コーガンド様……どこに行かれるんですか？」

ティバはコーガンドを見上げながら、弱弱しくそう呟く。

「仕事です……もう暗いですから気をつけて帰ってくださいね」

「……」

コーガンドの姿がどんどん闇に溶けて見えなくなっていく。その時ティバは心に決めた。

（私は……帰らない！）

そして、コーガンドに気づかれないように、彼の後に続き歩き出した。

コーガンドは、しばらく歩くと歩みを止めた。ティバはコーガンドが止まるのと同時に、近くにあった街灯の後ろに身をひそめる。
(仕事って・・・こんな真夜中にいったい何をするの・・・)

辺りはすっかり、完全な闇と静寂に包まれている。ティバはその暗闇と静けさに恐怖を覚えた。

「くすす。愚かな人間がやって来た」

突然、可愛らしい女の子の声が闇の中に木霊した。そしてティバは、驚きのあまり息を呑んだ。コーガンドのすぐ目の前に、金色に輝く二つの点が浮かんでいる。いや、よく見るとそれは金色の瞳だった。

すると、金色の瞳を持つ少女はコーガンドにニコツと笑いかけた。

「ねえ。あなたの魂はどんな味がするのかなア？」

「・・・」

そして次の瞬間、コーガンドはベルトにかけてあったナイフを取り出し少女の首元に突きつけた。少女はそれに動じる様子もなく反対に楽しそうに言う。

「あなたなら知ってるよねエ？ 私たちルビデには物質を通した攻撃は効かないってこと・・・」

「！！」

そしてそれとほぼ同時に、少女は空中にふわっと浮き上がった。

コーガンドの周りにヒラヒラと黒い羽が舞い落ちる。金色の瞳を持つ少女には、闇に溶けこむような漆黒の翼が生えていたのだ。

「くすす」

少女は軽く笑い声を漏らすと、空中高く浮き上がり、周りにあった家の屋根の上に着地した。そして次の瞬間、ティバは恐怖のあまりその場で凍りついた。

空中高くにたくさんの金色に光る玉が浮いている。それはすべて、黒い翼を持つ者の瞳だったのだ。

「また俺達の前に姿を現すか。笛使い」

低い男性の声が暗闇に木霊した。

「・・・私は何度でも現れますよ。あなた達ルビデがこの世から消えない限り」

コーガンドは驚くほど落ち着いた声でそう言った。

「あらー。あなたにできるのかしら？坊や」

すると、今度はコーガンドのすぐ隣に、彼より明らかに年上の女性が舞い降りてきた。すると彼女は、コーガンドの唇に自分の唇をそつと近づける。

「あなたの魂、とてもいい香りがするわ。でも、もう少し年上の方が好みかしら」

コーガンドは彼女の行動に何の動揺も見せず、ただその場で彼女の瞳を刺すように睨みつけている。

（コーガンド様っ・・・）

ティバは内心でかなり焦っていた。今はコーガンドにとっても、悪い状況なのだろうか。いや、よい状況のはずがない。それなのに、なぜ彼はあんなにも平然としていられるのだろう。

「おやー？可愛いお嬢ちゃん発見ー」

「！！！！」

背後から青年の声がしたかと思うと、肩に腕を回され、乱暴に引きよせられた。

「こんな所で何してるの？もしかして・・・あの笛使いのお友達？」

「・・・っ・・・」

ティバは予想外の展開に凍りついた。自分のすぐ耳元から聞こえてくる声に、震えることしかできない。

「んー。やっぱり子供の魂はとても美味しそうな香りがするね。さつさといただいちゃおうか」

その黒い翼を持った青年はそう言うと、ティバの肩に回していた腕をほどき、ティバの正面に座りこむ。すると、青年はティバの恐怖に引きつった表情を見て微笑んだ。

「何も怖がる必要なんてないと思うんだけどな。だって君たちは、生きるために動物を殺すだろ？それと同じ。俺達は生きるために人

間を殺す」

青年は当り前のそうに言うと、ティバの肩に手を乗せた。ティバは反射的にその手を払いのけようとしたが、力強く掴まれているせいで、肩を動かすことさえできない。

「俺達は君らの体の一部に触れるだけで、そこから魂だけを取り出すことができるんだ。まあ、もっと経験を積みめば、触れなくてもいいらしいんだけど・・俺にはまだ無理だしね」

青年はそう楽しそうに言うと、乗せている手に力を込める。

5 夕暮れの街の記憶？

すると、そこから青白い光がみるみる漏れ始める。

（もうだめだ・・・）

ティバはその時そう思った。そしてかたく目を閉じた。

♪♪♪

「！！」

その笛の音にティバの心臓が高鳴る。その音は、確かにコーガンドが奏でているものだ。そしてそれと同時に青年の手から解放された。

「-チツ」

青年は苛立ったように舌打ちをすると、空中へふわりと浮かぶ。そしてティバのはるか上空で言った。

「この曲を奏でられちゃあ、退散するしかないよなー。ルシウスさん」

すると、再びあの低い男の声が聞こえた。

「どうやらこの町には、そいつ以外にも美味しそうな若い魂が多くあるようだ。あとでゆっくり頂きに伺おう」

そしてルビデ達の気配は、一気にかき消された。

ルビデ達の気配が消えたが分かった、ティバはその場にしゃがみ込む。

（助かった・・・）

すると、少し離れた場所にいたコーガンドと目が合った。ティバは反射的にコーガンドから視線を外す。自分がこうなったのは、コーガンドの言いつけを守らずに来てしまった自分自身のせいだ。怒られても嫌われても、何も文句は言えない。

「ごめんなさい・・・」

ティバは自分の目の前で歩みを止めたコーガンドにポツリとそう言った。

「私が言いつけを守らずに来たから・・・」

すると、コーガンドはティバの頭にそつと手を乗せる。

「何言ってるんですか。無事で何よりですよ」

コーガンドはいつもの柔らかい笑みを浮かべながらそう言うつと、ティバに手を差し伸べた。ティバはコーガンドの手を借り、その場に立ちあがる。

「でもあなたが私の言いつけを守っていたら、こんな怖い思いをさせずに済んだのですが」

「・・・大丈夫ですつ。全然怖くありませんでしたから！」

そう言うつと、ティバはコーガンドにギュツと抱きつく。

「っ・・・ありがとう・・・ございました・・・」

ティバはコーガンドの優しさと温もりを改めて実感しながら、静かにそう呟いた。

コーガンドとティバは、再び二人並んで同じベンチに腰をおろした。まだ辺りはひっそりとした暗闇に包まれている。しかし、東の空のオレンジがかった色がもうすぐ朝が近いことを知らせていた。

「・・・何でコーガンド様は手をかけずに、私をルビデたちから救うことができたのですか？」

ティバはコーガンドの横顔を見上げながら、静かに言った。

そして暫くの沈黙の後、コーガンドは言った。

「それは・・・この笛の不思議な力のお陰なんですよ」

すると、コーガンドはポケットから銀色の横笛を取り出した。

「この笛は私がティバさんくらいの時に、父から貰ったものです。そしてそれと同時に私は父から“悪魔狩り”という使命を託されま

した」

「悪魔狩り・・・ですか？」

「そうです。この笛である曲を奏することによって、ルビデ達をこの中に封印することができるのですよ」

「何の為に・・・ですか？」

すると、コーガンドの表情がかすかに歪んだ。しかしそれは、すぐにいつもの柔らかい表情にかき消される。

「理由はありません。ただ私は、自分の宿命に沿って生きているだけですから・・・世界を回って悪魔を狩り、自分の命が尽きる前にこの笛を子孫に託す。それが私が受け継いだ、そして受け継がせる宿命です・・・」

そう言うつと、コーガンドはティバに向かっていつものように微笑んだ。

「でも、こんな人生でも少しは気に入っているんですよ。世界を回ればいろいろな人との出会いがある・・・私は一時的なものでもそんな出会いを大切にしたいと思っています」

コーガンドは明るくなり始めた空を見つめながら、力強くそう言った。

ティバはそんなコーガンドを見て、少しだけ悲しくなった。彼はきつと強い人間だ。でもきつと誰より寂しい人間でもあるのかもしれない。

するとティバは、少し戸惑いながらもコーガンドの手の上に自分の手をそつと重ねる。

「一時的なものなんかじゃありません」

「・・・」

「私は・・・コーガンド様とずっと一緒にいたいと思っていますから」
そう言うつと、コーガンドに向かって微笑んだ。コーガンドは驚いたように目を見開くと、困ったようにティバに笑いかける。

「ありがとうございます・・・でも私にはその気持ちだけで十分嬉しいですよ」

「……」

ティバは沈黙を守りながら、コーガンドの顔を見上げる。コーガンドのその笑顔には、寂しさの一欠けらも感じることができなかった。

自分はコーガンドをこんなにも必要としているのに、コーガンドにとつてのティバとの出会いはたくさんのお会いの一つではないのだろうか。

でもティバは思った。きっと強いコーガンドにも寂しく苦しい時だってある。そんな時、そばに居てあげられるのが自分でありたいと、そう思った。

「さて。ここでティバさんをお願いします」

「……？何ですか？」

すると、コーガンドはその場で立ち上がり、街並みのすぐ後ろにそびえ立っている山を指差した。

「あそこの山のふもとにある洞窟に、明日の夕方行ってもらいたいのです」

「？」

「とてもティバさんにとって、大切な事なので……お願いできますね？」

ティバは理由が分からず口を開きかけたが、すぐに閉じた。コーガンドのティバを見下ろす視線が、何か言う事を拒否しているように感じたからだ。

「分かりました……」

ティバは静かにそう答える。そしてコーガンドは、いつもの笑顔で言った。

「さて……そろそろ明るくなって来ましたし、少し休んでからティバさんにこの町を案内してもらいたいのですが」

その言葉にティバの心が躍る。

「はい！！喜んで！！」

ティバは満面の笑みでそう答えた。

その日一日、コーガンドはティバに付き合ってくれた。ティバにとってその時間はとても楽しく幸せなものになった。

そして時は驚くほどに早く過ぎ、夕方になった。ティバは一時的にコーガンドに別れを告げると、指定されていた洞窟へと向かった。ティバはその場所へ向かうため街中を歩いていると、果物などが並んでいる店の前で歩みを止めた。そしてその中の赤々としたリンゴに目が止まる。

（そういえば、アニタとレイタは元気かな・・・）

アニタとレイタとはあの日、コーガンドの笛の音を聞いてから会っていない。二人は自分たちを置いてしまった自分の事を嫌ってしまっただろうか。それとも・・・心配してくれているだろうか。

ティバはその店でリンゴを数個買った。そしてアニタとレイタの家へと向かった。

ティバはアニタとレイタの家の前まで来ると、ドアノブに手をかけた。今までだったら簡単にこの扉を開ける事ができたのに、今の自分は何故かそれをするのを躊躇ってしまったている。

きっとそれは、自分が二人をある意味裏切ってしまったことに対する罪悪感があるせいだろう。

「・・・!!」

その時、家の中からこちらへ向かってくる足音が聞こえた。多分、足音が二つあるのでアニタとレイタのものだろう。それにその音が

らして二人は急いでいるようだった。

そしてすぐに、ティバの握っていたドアノブが内側から回される。その時、ティバは思わず玄関先に置いてあった植木の裏に身を隠した。途端にその扉から、アニタとレイタが飛び出す。

二人はその場で足を止めると、山の方を指差し、レイタが先頭でその場から走り去った。ティバは二人が見えなくなったのを確認すると、二人が走り去った方へ目を向ける。

もう町はすっかりオレンジ色に染めあげられていた。

（こんな時間なのに・・・あんな真剣な顔してどこに行ったんだろう？）

ティバは玄関の扉にリンゴの入った紙袋をそつと立て掛けると、二人の走り去った方へゆっくりと歩き出した。

そして歩いているうちに気づいた。微かにだが、コーガンドが吹く音色が聞こえている。その曲はティバのお気に入りの曲でもなく、あの時ルビデを退散させたものでもなかった。ティバが初めて耳にするメロディーだ。

そしてそれは、歩けば歩くほど大きくなった。

（きつと二人もこの音色を聞きつけたに違いない・・・）

そしてしばらく歩くと、その音色は何の前触れもなくピタリと止んだ。ティバは一瞬戸惑ったが、その音色が聞こえていたはずの方向へ向かって歩き続けた。

もう随分長い間歩いたような気がする。もう太陽はすっかり沈ん

で、辺りは暗闇に包まれていた。それに今ティバがいる場所は、山のふもとの森の中。辺りは奇妙なくらい静かだ。

ティバは足の痛みを止めると、その場にへなへなとしゃがみ込む。

（アニタ・レイタ・どこ行っちゃったの・・・？）

すると、ティバから少し離れた所を開けた場所があるのが分かった。ティバは何となくそこが気になって、再び立ち上がるとその場所へ向かった。

（・・・！）

そこには洞窟があった。そしてそれと同時に、コーガンドが言っていた事を思い出した。アニタとレイタのことが気になって、その事をすっかり忘れてしまったのだ。

（きっとコーガンド様が言っていたのはこの洞窟のことだ・・・）

ティバは内心で落ち込んだ。忘れていたとはいえ、また彼の言いつけを破ってしまったのだ。

・・・コーガンドは、自分の事を嫌いになってしまったのだろうか。

「！」

その時、笛の音が聞こえた。それにそのメロディーには聞き覚えがある。それは、あの時コーガンドがルビデから自分を救ってくれた時に聞いたメロディーだ。

そしてティバは意を決して、そのメロディーが聞こえてくる方へ歩き出した。

そして見つけた。ちょうど町の中心にある広場で、コーガンドはあの不思議な笛を使い、メロディーを奏でている。

そして不思議な事に、淡く光る光の玉が次々と笛の中へ吸い込まれていくのが見えた。その光景はとても神秘的で、ティバは綺麗な絵画の中にいるような感覚を覚えた。

そしてその淡い光が、すべて笛の中へ消えたかと思うと、そのメロディーも同時に終わりを告げた。すると、コーガンドは何事もなかったかのように歩き出した。

「コーガンド様!!」

ティバは思い切ってコーガンドに駆け寄る。コーガンドは驚いたように肩越しに振り返ると、歩みを止めた。

「ティバさん・・・こんな所にいましたか」

「・・・コーガンド様。どこに行かれるのですか・・・？」

すると、コーガンドは困ったように微笑む。

「ティバさんも無事に見つかりましたし・・・この町をです。ここでの仕事は先ほど終わりましたから」

「!!!!!!」

ティバは驚きのあまり言葉を失った。まさかこんなにも早く、この瞬間が来てしまうなんて。

「ルビデ達に狙われやすい子供たちを、あの洞窟に避難させておいたのですが・・・ティバさんが無事で何よりです・・・そういえば、お友達がティバさんの事を心配していましたよ？あの洞窟にいると思いますから、行ってあげてはどうですか？」

コーガンドはティバの顔色も気にせずに、次々と言葉を並べる。

そして絶望の闇がティバを支配した。

「行かないください」

ティバはコーガンドのローブを力強く引っ張る。

「私は・・・コーガンド様とずっと一緒にいたいんです!!」

するとコーガンドは、ティバの手を自分の服から引き剥がした。

「いいけません。前にも話したでしょう？私は、自分の宿命に沿って

生きて行かなくてはいけないんですよ。それに死と隣り合わせの旅にティバさんを連れていくことはできません」

「……」

ティバはコーガンドの顔をじつと見上げた。やはりその顔には、悲しみの一欠けらも浮かんではいなかった。そこにあるのは、ただ有無を言わせない冷酷な瞳だけだ。

「ティバさんに最後のお願いがあります」

コーガンドは表情を和らげ、優しくそう言った。

「この町で今までどうり幸せに暮らしなさい。それが私からの願いです」

「……」

「ティバさんには私の言う事を聞いてもらったためしが無いのですが……最後の願いだけはきいてもらいますよ？」

「……でもっ……」

するとコーガンドは、ティバに背を向け歩き出した。

「最後の願い……それは私の“望み”でもあることを忘れないでください」

肩越しに振り返りながら、コーガンドはそう言った。そしてその姿は、夜の闇の中へだんだんと溶け込んでいく。

（私は……諦めない……!）

ティバはコーガンドが消えて行った闇の中を見つめながらそう思った。そして全速力で走りだした。

少し走ると、コーガンドの後姿が見えてきた。

「待って!!コーガンド様!!置いて行かないで!!」

ティバはコーガンドの背に向かって、必死にそう呼びかける。し

かし彼は歩みを止めようと振り向こうともしない。

それでも諦める気にはなれなかった。そしてあと少しで自分の指がコーガンドの手に触れる。ティバは必死で腕を伸ばした。

「――！！」

その時、ティバは足元の石につまずいて勢いよく倒れた。コーガンドは一瞬立ち止まってこちらを振り返ったが、曖昧に微笑むとそのまま何事もなかったかのように歩き出す。

「――っ……」

ティバは必死に立ち上がろうとしたが、転んだ時に足を捻っただけで、立ち上がることができない。それに夕方から今までずっと歩き続けてきたのだ。もう歩くことの気力さえ、ティバには残っていなかった。

そしてさっきまで見えていたコーガンドの後姿は、闇に溶けて完全に見えなくなった。

どれくらいの時間が経っただろう。ティバは街灯の下にうずくまり、泣いていた。

（っ……何で置いて行かれなきゃいけないの……？私はずっと一緒にいたかったのに……！）

その時、ティバの目の前に何か黒い物が舞い落ちた。手に取って見ると、それは羽だった。

――……真っ黒な。

「置いて行かれたか。娘」

「――！！」

驚いて見上げると、そこには大柄な男が立っていた。一番最初に目に付いたのは、彼の背から生えている大きな黒い翼だ。一目見て、ティバは彼がルビデという事が分かった。

「本当に可哀想な奴だな」

そう言つと、彼はティバのすぐ目の前にしゃがみ込む。ティバはドキリとしたが、顔を伏せて、できるだけ落ち着いた声で呟いた。
「ほつといて。私はルビデなんかには用は無いんだから」
すると、彼は微かに笑い声を漏らす。

「本当に用は無いんだな・・・？俺にはその涙、止めてやれるかもしれないぞ？」

「！！」

ティバはハツとして彼の顔を見上げた。すると彼は、微笑みながらティバの目に溜まつた涙を人差し指で拭い取る。

「まあ立て」

彼はそう言つと、ティバの手を掴んでその場に立ち上がらせた。

「お前の望み・・・それはあの笛使いとずっと一緒にいることだろう？」

ティバは図星をつかれてドキリとしたが、すぐに「ええ」と答えた。すると、彼は口元に奇妙な笑みを浮かべた。

「その願い、俺が叶えてやろう」

「-！！ほんとにつ！！」

ティバは彼の口から出た信じられない言葉に思わずそう叫ぶ。それが本当になるのなら、これ以上嬉しいことがあるだろうか。

「ただし、条件がある。それを守るのなら、俺もお前の願いを叶えると約束しよう」

その言葉も今のティバには関係ないことになっていた。

「分かつた・・・条件は何？」

そして彼は満足そうな笑みを浮かべた。

「それは、俺に定期的に人間の魂を提供する事だ」

「！！」

「そしてその魂は、あの笛使いの血縁者の者に限る・・・そうすれば笛使いには“呪い”がかかり、お前から死んでも逃げられなくなる」
「・・・・」

ティバには、彼の口から発せられる言葉が信じられなかった。彼は自分に人を殺せと言っているのだろうか。そんな事できるはずがない。

「そうだな・・・俺は年をとった魂は好きじゃない。せめて人間の年である、三十歳までの魂を俺に提供しろ」

「ちよつと待つて。私に人を殺せとでも言うの？私にはそんな事できないし、そんな力もない」

ティバは彼の顔を見上げながら、落ち着いた声でそう言った。

「んな事は分かってるよ。お前のそんな小さな体じゃ、人を殺めることもできんだろうよ」

彼は相変わらず、口元に笑みを浮かべながら言った。

「じゃ、どうやって・・・」

すると突然、頭を上から押さえつけられた。

「！！」

「こうする事だ」

彼がそう言うのと同時に、その手から淡い光が溢れはじめた。そしてそれは、やがてティバの全身を包み込むようにして流れ出し、少したつと体吸い込まれるようにして消えた。

「これでお前は、“人間の生命力”無しでは生きていけない。そしてお前の意思しだい、人間の魂を奪うことも可能だ」

「・・・！」

ティバは自分の体をまじまじと見つめた。一見、変わった所は見当たらない。

「あとは・・・そうだな。人間から力を取るのにはコツがいる。初めのうちは、何かそれに合った道具を使うといいだろう」

「・・・本当にあなたの言うことを聞けば、コーガンド様と一緒にいられるの？」

ティバは彼の金色に輝く瞳を見上げながら、静かに言った。

「ああ。約束しよう」

彼は何の躊躇いも無く、そう答えた。そして自然とティバの顔に

笑みがこぼれる。

（これでコーガンド様と一緒にいられる・・・！）

「ここで重要なことがもう一つある」

「！？」

「それには期限があるという事だ・・・まあそれは永遠といってもいいほど、長い時間だがな」

「その期限って・・・？」

すると、彼はさらに言葉を続ける。

「お前が笛使いの血縁者の魂を取るによって奴には呪がかかる。お前とずっと一緒にいる・・・つまり、笛使いはお前の魂が消えるまで、この世を本当に去ることはない、という呪いがな」

「・・・」

「そしてそれは、笛使いに新たな宿命を与える。それは、俺達が食い損ねたこの町の子供たち130人の魂を笛に封印する事だ。それをしなければ、お前から決して逃げだすことはできない」

「・・・」

「つまり・・・笛使いが130人の子供達を笛に封印するまでが俺がお前に与えた期限ということになるな」

言い終えると、彼はティバを見降ろした。

「・・・分かったか？」

「・・・分かった・・・」

彼が言ったことをしっかりと頭に刻み込みながらティバはそう答えた。

すると、彼は再び口元に満足そうな笑みを浮かべる。

「いいか。俺がお前に言った約束を守れなければその呪いは無効になる」

「分かつてる・・・」

すると、彼はティバに手を差し出してきた。ティバは少し驚いて彼を見上げる。

「何・・・？」

「俺とお前は“約束”をしたんだ。その証明というわけだ」

「・・・」

ティバは一瞬ためらったが、彼の手をしっかりと握った。

「俺の名はルシウスだ」

「私はティバ」

すると、ルシウスはティバに向かって微笑んだ。

「よろしくな。ティバ」

それからというもの、ティバは人間の生命力を奪い続けて生きてきた。奪い続けなければ自分の命をこの地上にとどめておくことができなかったのだ。

そしてそれと同時に、ティバは永遠の命を手に入れた。人間の生命力を奪い続ければ生きていける・・・つまりそれをし続ければ、ティバはこの世に永遠と存在することができたのだ。

そしてもちろん、ティバはハーメルンの町にすることができなくなった。居場所がなくなったティバは、ルシウスについて行くことに決めたのだ。

・・・でもなぜだろう。

永遠とっていいほど長い時間を手に入れたのに、今も私はあの頃のまま、何も変わっていない。あの人の背中を今でも追い続けている。

私の手が、彼の背に届く日は来るのだろうか。そしてもし届いたとしても、彼はこんな私を受け入れてくれるのだろうか。

・・・いや、受け入れてくれるはずがないだろう。その証拠に、あの時の彼の瞳は氷のように冷たかった。かつてのように優しく微笑んではくれなかった。

きつと今の私は“死神”でしかないのだ。人を苦しめ、悲しめる

生き物。そしてそんな私は、彼の事を苦しめ、そして自分自身をも苦しめている。

「ねえ、シアン」

ティバは、満天の星空を見上げながら呟いた。

「なんだ？」

「・・・私は死神だと思う？」

するとシアンは瞳を丸くしてティバを見ると、笑い声を洩らした。
「何言ってるんだよー？ティバが死神なわけないだろ？そして俺達ルビデも死神じゃない！！」

「・・・なんでシアンはそう思うの？だって私もあなたも人の命を奪ってるじゃない」

ティバはたんたんとした口調でそう言った。

「んー。良く分からないけど、死神は人の命を奪って天国や地獄に運ぶ奴の事をいうんだろ？でも俺達はそんなめんどくさい事はしない。ただそれを吸収して、自分が生きる力にするだけだ」

「・・・」

「だから俺もティバも普通の生き物でしかない！！」

そう言つと、シアンはティバに向かってニカツと笑いかけた。そして不思議なことに、ティバもシアンに向かって笑い返すことができた。

「じゃーシアン。何して遊ぼーか？」

そう言つと、ティバはその場で立ち上がる。

「えっ！遊んでくれるのか！？」

「うん。何がいいー？」

「えつとな・・・」

するとティバは、シアンに向かって微かに笑みを漏らした。確かに自分達は、死神ではないかもしれない。それをしなければ、自分達のほうが死んでしまうのだから、それは間違っていないと思う。

でも大切な人を奪われた側から見ればどうだろう。私は、ただの殺人者にすぎないのではないだろうか。

ティバの脳裏にあの日の事がよみがえった。あの時の青年の泣き叫ぶ声は、今でもティバの耳にこびり付いて決して離れることはない。

ティバはある日の午後、ある家の屋根の上に姿を現した。右手には鉛色に輝く大きな鎌。それはもうすっかり、自分の板に付いてしまっている。

もうこれを使う必要はないのだが、この鎌はあの町に住んでいた頃、自分の家の倉庫の奥に眠っていたものをそつと貰ってきたものだ。今ではこれはあの町の思い出に唯一つながら大切なものだ。だからティバは、この鎌を手放せずにいる。

すると、磨き上げられた鎌の柄に自分の顔が映し出された。そこにいるのは、赤毛とグレーの瞳を持った自分ではなく、黒い髪と黒い瞳を持った自分。不思議な事に、いつの間にかティバの髪と瞳は闇色に染まってしまったのだ。

しかしティバは、その事をあまり気にすることはなかった。赤毛も気に入っていたが、これもこれで何となくだが気に入っていた。それに今いる国の人は、ティバと同じ色の髪と瞳を持った人たちがたくさんいる。

実際、相手には自分のことが見えていないのだが、ティバはこの国に来て安心感を覚えた。

（そろそろ行こうかな・・・）

ティバは再び鎌の柄を握り締めると、屋根から家の中へ吸い込まれるようにして姿を消した。

ティバはソファ―に腰掛け、本を読んでいる男性の前に姿を現した。そう・・・今日はルシウスに彼の血縁者の魂を提供する日だ。最初の頃はこの時が嫌で仕方がなかったが、今ではそれも慣れてしまった。彼と一緒にいるためには仕方がない・・・そう思うようになった。

そしてティバは何の躊躇いもなくその男性に向かって鎌を振り下ろした。

「驚いたよ」

「!!!!」

ティバはあまりの突然の事態に、鎌の動きを止める。

「こんな可愛い女の子が俺を殺しに来るなんて」

その男性は、読みかけの本から顔を上げると、ティバの瞳をしかつりと捕らえながらそう言った。

（この人には私が見えてる・・・？）

ティバには予想外の展開に息をのんだ。自分が、今を生きている人間に見えるなんて・・・今まで一度もなかったのに。

「でも安心したよ。この時が来るまで、毎日びくびくしながら生きてきたんだ。いつ突然の事故に巻き込まれて全身バラバラになって死ぬかとか、こわーい死神がやって来て首をちょん切られるかってね」

「・・・・・・」

ティバはまじまじと彼の顔を見つめる。なぜ彼は、こんなにも明るくいられるのだろう。今、まさにティバに殺されようとしているのに。

すると、彼はそんなティバを見て明るすぎるぐらいに笑った。

「はっは。何で君がそんな顔しているんだい？殺るなら早く殺りなよ。俺の宿命は果たした。後は夕斗に任せることにしたよ・・・まあ、あのお馬鹿な夕斗でも残りはあと数人だからきつと死なずにすむしね・・・」

そう言葉を並べると優しく微笑む。

一方ティバは悲しくなった。彼はきつと恐怖なんか感じていない。彼にあるのは、夕斗という人間を死なさせずにすむという安心感だけだ。

「・・・・・・」

しかしティバはルシウスとの約束を破るわけにはいかなかった。それに彼は、今まで自分のために犠牲にしてきた人たちと同じではないか。彼が“特別”な理由なんてどこにもない。

そしてティバは彼の体を持っていた鎌で切り裂いた。その瞬間、彼が持っていた本はパタリと音をたて床に落ちる。

その瞬間、彼は苦しそうな表情を見せたかと思うと眠ったかのようにな動けなくなった。

「兄貴！！！！」

突然、ティバの耳に叫びにも似た声が飛び込んできた。驚いてそちらに目を向けると、部屋の入り口付近に中学生くらいの男の子が立っていた。おそらく、たった今家に帰ってきたのだろう。

すると、その青年はティバがたった今鎌を振り下ろした男性に駆け寄った。

「兄貴！兄貴！兄貴！どうしたんだよ・・・・・・？！」

青年は必死になってその彼の体を揺すっている。しかし、彼の瞳が再び開かれることは決してないだろう。たった今、自分がその男性を殺したのだから。

そしてティバはその場から姿を消そうとした。

「待てよ」

突然、呼び止められてティバはドキリとした。

（まさか・・・彼にも私が見えている・・・！？）

「あんたのせいだろ！？俺はあんたがそのでっかい鎌で、兄貴を切り裂いたのを見た！！！！」

彼は憎しみと悲しみが入り混じったその瞳で、ティバを睨みつける。

「兄さん、大声出してどうしたの？」

入口の外の方から声がした。

「夕理！！」

その瞬間、ティバはその場からすぐさま姿をかき消した。きっと彼にも私の姿が見えている。こんな“死神”みたいな姿、誰にも見られたくない、ティバはそう感じた。

6 涙とありがとう？

「ティバ、聞いてるかー！？」

「！！！」

ティバは自分の顔をまじまじと覗き込んでいるシアンを見て、現実に引き戻された。

「えっと・・・ごめんね、シアン」

すると、シアンは再びその場にドカリと腰をおろした。

「やっぱり遊ぶの止めた！！だって、ティバがそんな元気ないんじゃないー遊ぶ気にもなれないよー」

「・・・」

ティバはあきれ顔のシアンを見下ろすと、その場に腰をおろす。

「私も本当は遊びたいと思ってたのになー」

「本当かよ？ティバは遊んでも、絶対心までは遊んでないな！」

「ー・・・」

ティバは、シアンの横顔を見ると軽いため息をついた。何故シアンには、こんな所まで分かっってしまうのだろう。やっぱり作り物の笑顔には、限界があるのだろうか。

「あー！！」

「・・・どうしたのー？」

「そう言えば、この前ルシウスさんが言ってたんだけど、“光を受け入れる体”というのがあと少しで手に入るらしいぞ」

「！！」

ティバはシアンの言葉を聞いてドキリとする。

「その“光を受け入れる体”というのは、多分、光の中でも生きていける体っていう意味だろ？」

「・・・うん」

ティバはシアンの言葉に、ドギマギしながらそう答えた。

「俺は別に光の中でも生きていけなくてもいいと思うんだよね・・・それより俺は黒い翼が欲しい！」

ティバはシアンの意外な発言に驚いた。確かにシアンはルビデ族だが、その背に黒い翼は生えていなかったのだ。

「あえて言うなら、ルシウスさんみたいな翼だな！あんなでっかくてかっこいい翼、俺も欲しい！！」

そしてティバはシアンに笑いかけた。

「きつとシアンにもそのうち生えてくるよー」

そしてシアンもティバに元気に笑いかける。

「そうだよな。じゃあ、俺とティバ、どっちが先に生えるか競争な！！ティバも俺らと一緒にいるんだから、早く皆のような翼が欲しいだろ！？」

「・・・」

ティバは言葉を詰まらせる。自分にそんな翼、必要ない・・・むしろいない。だって私は、“ルビデ族のティバ”ではなく“ハーメルンの町のティバ”なのだから。

「うん・・・」

すると、シアンはティバに元気がないのに気付いてか意外な言葉を口にする。

「・・・そうだ！！アイツの家に行かないか！？」

「アイツ？」

「ああ。ティバが嫌われたーって言ってた人間の家だよ」

ティバの脳裏に、凧沙の顔がうかんだ。今頃、凧沙は何をしているだろう。もしかしたら、こんな私の事なんか、これっぽっちも思ってくれていないかもしれない。

「俺の考えでは、ティバに元気がないのは、あいつのせいもあると見た！だから俺が一緒に行って、仲直りさせてやるよ！」

シアンは元気にそう言う。ティバは驚いたようにシアンの顔を見

ると、自然に笑顔になった。

「うん。ありがとー、シアン」

不安はあるが、行ってみようとティバは思った。それに・・・シアンが一緒ならきっと大丈夫だ。

風沙はカーテンを開けた。初夏の日差しが、サンサンと部屋に降り注ぐ。

（あー・・・いい天気）

こんな晴れ渡った青空を見ると、昨日の事がまるで嘘のようだ。そして昨夜、アニタとレイタにティバについて話を聞き、少しだけが分かったような気がする。

ティバはある日、笛の音に誘われて姿を消した。その先にいたのがコーガンドという人間だ。そしてティバはコーガンドに恋・・・？をしてしまったのだ。

「はー・・・」

風沙はため息をついた。ティバはきつと、今でもコーガンドを追い続けているのだろう。それはあの時のティバの顔を見れば、一目瞭然だ。

（てか、学校行かないと・・・）

今日は月曜日。また同じような一週間が始まる。いや、同じではない。今週は、今まで以上に嫌な一週間になりそうだと風沙は思った。

その原因は夕斗だ。昨日の事件のせいで、今まで悪かった関係がより一層悪くなってしまったことは確かだ。それに夕斗とは隣のクラス。避けたとしても、最低でも一回は会う事になってしまうだろう。

「・・・はー」

凧沙は再びため息をつく、重い足取りで部屋を後にした。

「おはよう。凧ねーさん」

通学路を歩いていると、突然後ろから声をかけられた。振り返ると、そこには夕理が立っていた。相変わらずその顔には、笑みが浮かんでいる。

「あ……。おはよう、夕理くん」

凧沙も微笑んで言葉を返す。

「朝から凧ねーさんに会えるなんて、今日はラッキーな一日になりそうだよ」

「あはははは……。」

そう言う、二人は肩を並べて歩き出した。

「ねえ……。昨日、夕斗は怒ってた？」

少し歩くと、凧沙はドキドキしながら夕理に問いかけた。

「えーと……。怒ってたというか、昨日は遅く帰って来たと思ったら、そのまま自分の部屋に閉じこもって出てこなかったよ」

「……。そうなんだ」

凧沙は内心で落ち込んだ。やっぱり夕斗は怒っているのだ。

「今日って夕斗、普通に学校くるよね？」

「多分、普通に行くんじゃないかなあ。兄さん、根は真面目だからさぼったりはしなそうだし」

「そうだよね……。」

凧沙はそう言う、溜息をつく。すると、そんな凧沙をみた夕理が口を開いた。

「もしかして風ねーさん、兄さんにいじめられてるの？兄さん怒ったら、てがつけれないからなあ」

「違うっ！」

風沙はすぐに否定した。

「じゃ、どうしたの？」

「それはティ・・・」

そこまで言うと、風沙ははっとして口を閉ざす。もしかしたら夕理も内心ではティバのことを憎んでいるかもしれない。

不自然な沈黙に、夕理は不思議そうに風沙の事を見つめている。

風沙は焦った。何か話さないと・・・

「そう言えば、夕理くんのお兄さんって、心臓の発作で亡くなったんだよね？」

言った途端、風沙は後悔した。きっとこれは夕理にとって、触れられたくない話題の一つだろう。そして、みるみる夕理の表情が暗くなるのが分かった。

「うん。そうだよ。少なくとも医者はそう言ってた・・・でも兄さんは、“兄貴は死神に殺された”って言ってるんだ」

「・・・」

「この世死神なんているわけないのに、変な話だよね」

「・・・そうだよな」

風沙も何とかそう答えることができた。夕理は少なくとも、死神が直接手を下す所を見ていないのだろう。風沙は自分が嫌になった。これではまるで、ティバが死神だと疑っているみたいだ。

風沙は別れ道で夕理に手を振ると、学校へ向かった。

黒一色で染められた空に、生ぬるい風が吹き抜ける。そこには月

も星も出ていない。周りにあるのは、ただの漆黒の世界だけだ。

（てか、何で俺空飛んでんだ？）

驚いたことに、夕斗は今空中に浮かんでいた。そして微かにだが、遙か下の方に、白い一本の道が見えた。

（ひとまず地面に降りるか・・・）

浮かんでいることは何故か気にならず、夕斗は下にある道を目指す。そして、地に近づくにつれ、道を歩いている人影が見えてきた。その人は大きなカバンを肩に掛け、一定の歩調で歩いている。

<コーガンド！！>

夕斗は反射的にそう叫ぶ。しかしコーガンドは夕斗の声に気づく様子もなく、ただ黙々と歩き続けている。

<おい！！聞いてんのか！？>

夕斗は内心でイライラしながら、空中で再びそう叫んだ。

その時、強い突風が夕斗の髪をかき上げる。それと同時に、コーガンドの被っていた帽子が宙に舞った。そしてそれは、地に落ちる前に誰かの手によって捕まえられた。

「！！！」

夕斗は自分の目を疑った。コーガンドの帽子を捕まえた人物、それは大きな黒い翼をもった悪魔だったのだ。

「ルビデ族・・・ルシウス」

コーガンドは目の前に現れた人物に向かって微かに表情を曇らせると、呟くようにそう言う。

「ほお・・・名前を覚えていただけるとは嬉しい限りだな」

黒い翼をもつ者―ルシウスは、口元に笑みを浮かべながら言った。すると、コーガンドはルシウスの前まで歩み寄り、彼の手から帽子を乱暴に引き剥がした。

「あなたはハーメルンの町にいたルビデですね。わざわざ私の前に現れるなんて・・・消されに来ましたか？」

コーガンドは、ルシウスを鋭い瞳で睨みつけながらそう言う。夕斗はそんなコーガンドに思わずゾクリとした。こんなコーガンドを

見るのは初めてだ。

「・・・今日はお前に、ある事を知らせに来たんだよ」

「・・・!？」

次の瞬間、さらに強い突風が吹きつけた。

「!!!!」

ピ。ピ。ピ。ピ。・・・

「- -!」

夕斗は鳴り響いた携帯のアラームにハッとして目を開ける。

（またあの夢か・・・）

この夢をいったい何回見ただろう。確か初めて見たのは、兄貴が死んでから数日たってからだ。その時はただの夢だと思い気にしなかったが、同じ夢を再び見た時、気になってコーガンドに訪ねたのだ。・・・そして呪いのことを知った。

兄貴が生きていた時、不思議な笛を使っていたことは知っていたが、今度はそれが自分に引き継がれたこと。そしてその日から、笛に封印する最後の子供を探し続ける日々が始まったのだ。

「やばっ」

時計を確認すると、起きてから約十分は経過しようとしているところだ。夕斗は急いでベッドから降りると部屋を後にした。

放課後になると、凧沙は急いで荷物を鞆に詰め込んだ。

（早く部活行かないと・・・）

風沙は奇跡的に、これまで夕斗に会わずにすんでいた。それに、今夕斗のクラスはHR中。今すぐ部活に直行すれば、もう夕斗と会う心配はしなくてすむ・・・少なくとも、今日だけだ。

「あれ？風沙にしては珍しいんじゃない？いつもなら部活行くの嫌がつてだらだら準備してるのに」

明日香はバドミントンのラケットを肩に掛け、風沙の机までやって来るとそう言う。

「うん。今日は何故だかやる気があるんだよ」

風沙は、顔に曖昧な笑みを浮かべながらそう答えた。

「んじゃ、途中まで一緒に行かない？私もこれから部活だし」

「うん」

すると何かに気づいたように、明日香は、生徒たちの声で溢れている教室を見渡す。

「そういえば、美春は？」

「多分、もう部活行ったと思う。掃除場からそのまま行ってるらしいから」

「そーなんだ。んじゃ、うちらも行きますか」

「うん」

風沙は鞆を肩に掛けると、明日香のあとに続き教室を出た。

風沙は、二階から三階への階段の踊り場まで来ると、そこで歩みを止める。

（ここまで来れば安全だ・・・）

すると、ちょうど上りの階段から下りてきた人物と目が合った。そしてその瞬間、いやな汗が一気に噴出す。その人物とは、まさし

く夕斗本人だったのだ。

「あー・・・」

凧沙は自分の顔を見て立ち止まった夕斗見ると、引きつった笑みで夕斗に笑いかける。

（ていうか、何でこんな所にいるの・・・！？八組はHRやってたじやん・・・）

すると、夕斗はそんな凧沙を見て不気味な笑みを浮かべる。

「何？また怒鳴られるとも思ったわけ？」

「・・・」

「だいじょーぶだよ。俺はそんなに短気じゃないからな！」

（十分短気だと思うけど・・・）

「じゃ、私部活あるから」

凧沙は呟くように言つと、夕斗の隣を通り過ぎ、階段を駆け上がった。なるべくなら、接触をしない方が身のためだろう。

「ちょっと待てよ」

「-!」

凧沙は驚いて肩越しに振り返る。すると、夕斗は人差し指で上を指差した。

「ちよつとあんたに言っておきたい事があるからな。上のほうで話さね？」

「・・・」

凧沙はこの時思った。今まさに、想像していたような嫌な事が起こるうとしていると。

凧沙は屋上へ続く階段まで来ると、その一番上の段に（夕斗と適度な感覚をあけて）腰をおろした。すると、夕斗は制服のポケットから、古い横笛を取り出す。

凧沙はそれを見て再びドキリとした。

「俺がこの笛を使ってる理由は知ってるよな？」

「・・・ティバをそこに封印するためでしょ・・・？」

凧沙はできるだけ落ち着いた声でそう答える。すると、夕斗は微笑かに笑い声をもらした。

「あーそうだよ。じゃあ、何で、俺がその死神をこの笛に封印しようとしているか知ってるか？」

「・・・」

凧沙は言葉を詰まらせた。夕斗が何かの目的のために笛を使っているとは思っていたが、その理由を深く考えたことはなかった。

「いったい何なの・・・？」

夕斗の次に発せられる言葉は、きっと凧沙にとって悪いことに違いない、そう思っただけでも、その言葉を凧沙は口にする。

「呪いを解くためだ」

「・・・！！」

凧沙は夕斗の口から出た予想外の言葉に大きく目を見開く。 “呪い” その言葉は、空想の世界の出来事でしかないはずなのに。

「・・・どんな？」

「死神から受けた呪いだよ」

「！！」

「俺はあの死神をこの笛に封印しなきゃあ、三十歳まで生きられない・・・つまり殺されるんだ。兄貴と同じように」

「・・・」

凧沙は何も口にすることができずにいた。今、凧沙にあるのは驚きと絶望だけだ。

「じゃあ・・・夕斗がティバをその笛に封印しないと、夕斗はティバに殺されるっていうの・・・？」

凧沙は震える声で、とぎれとぎれにそう言う。

「そーだよ」

「・・・」

凧沙は今の気持ちを抑えることができず、その場で素早く立ち上

がると、一目散に階段を駆け降りた。夕斗の言っていることが信じられない・・・いや、信じたくなかった。

「俺は!!」

凧沙はその言葉に肩越しに振り返る。そして、夕斗は凧沙の瞳をしつかりと捕らえると、言った。

「あの死神を、兄貴のためにも絶対に封印してみせる」

「・・・」

「だから凧沙はあの死神とかかわるな・・・あの死神が凧沙にかかわればかわるほど、封印しづらくなるんだよ・・・」

「・・・」

凧沙は夕斗から視線を外すと、階段を駆け降りた。

凧沙はその日の夜、勉強机の前に座ると、漢字のテキストを開いた。しかし、開いただけ。その内容は一つも頭の中に入ってくることはないだろうと凧沙は思った。

何故なら、今日夕斗が言っていたことが気になって仕方がなかったからだ。

そして今とはかくティバと話をしたかった。仮に、夕斗がいつていたことが本当だったとしても、きっと何か大きな理由があつてこそやったものだろうと凧沙はそう思う。

そして、凧沙はティバのことが心配だった。今頃、あの時のように泣いているのではないだろうか。

（ティバ・・・どこにいるんだろう・・・）

そして次の瞬間、部屋の中が一気に暗くなる。

「!!!!」

凧沙は驚いてその場で立ち上がった。

（誰かが外から消した・・・？）

風沙は、高鳴る心臓を押さえて冷静にそう判断すると、廊下のス
イッチを入れるため、扉に手をかけた。

「風沙」

突然、背後から聞き覚えのある声で呼びかけられた。風沙はその
声を聞いてドキリとした。その可愛らしい声はまさしくティバのも
のだったのだ。

「ティバ・・・？」

風沙は振り返ると、暗闇に立っている人物にそう呼びかける。

そして暗闇になった風沙の瞳に、しっかりとティバの姿が映し出
された。それと同時に、ティバの隣に立っている男の子に目がいつ
た。

（誰だろう・・・？）

すると彼は、風沙に真剣な眼差しを向けると言った。

「ティバがあんたに言いたいことがあるんだってさ。聞いてやって
くれよ」

「・・・・・・？」

風沙は彼の予想外の言葉に内心驚いたが、それに「うん」と答え
る。すると、しばらくの沈黙の後、ティバが口を開いた。

「・・・風沙、私の事嫌いになっちゃった・・・？」

ティバは不安の入り混じった瞳で風沙を見上げている。

「そんな事ない・・・。私はティバのことが心配だった・・・」

風沙は恥ずかしさを感じながらも呟くようにそう答える。すると
ティバは驚いたように目を見開き、風沙の所に歩み寄った。

「本当に・・・？」

「うん・・・」

風沙がそう言うのとほぼ同時に、ティバは風沙に抱きついた。

「ありがとー風沙！大好きっ！」

そして風沙はティバの肩にそっと手を乗せる。風沙もティバと同
じくらい嬉しかった。ティバの笑顔が自分をこんなにも幸せにして
くれるなんて・・・思いもしなかった。

その時、夕斗の顔が脳裏に過ぎったが、そんなこと今の風沙には関係ない。

「シアンもありがとー。風沙とまた仲良くなれたのも、シアンが私についてきて来てくれたお陰」

ティバは風沙の体から離れると、後方に立っている少年ーシアンに向かってそう言った。

「ティバが元気になったんなら、それでうれしーよ」

シアンは子供らしい笑みを浮かべると、嬉しそうにそう言った。すると、ティバは風沙の手を掴み、シアンの隣まで風沙を引っ張って来た。

「風沙。紹介するね。この子は私の友達でシアンっていうの」
「・・・!!」

風沙はシアンの顔を見下ろすとドキリとした。彼の瞳は、この暗闇の中でも美しい金色に輝いている。この瞳は、あの時の黒い翼をもった悪魔たちと同じものだ。しかし彼の背に黒い翼は生えていない。瞳以外は、普通の男の子と変わらないように見えた。

「初めまして。人間さん」

シアンは風沙にニカツと笑いかけると、手を前に出す。

「あ・・・」

「人間たちは友好の印にこんな事をするんだろー？だから俺は人間さんと友達になりたいからこうするぞ」

「うん・・・そうだね」

風沙はシアンの行動に少ばかり驚いたが、シアンの差し出された手を握った。

「あったかいなー。人間さんの手は」

「・・・え？」

すると、シアンは両手で風沙の手を包み込むようにして握った。俯いているせいで表情を確認することはできなかったが、その声には寂しさが入り混じっているように感じる。

「俺と違って力で溢れているから、きつとこんなにあったかいんだ

よなー」

「……」

凧沙はシアンの言葉に驚いた。自分はただ平凡に生きているだけなのに、こんなことを言われたのは初めてだ。それとも、シアンやティバのような“普通の人間ではない者”にとって、普通の人間は羨ましいものなのだろうか。

そしてしばらくの沈黙の後、凧沙はシアンのひんやりした手を振りほどこうとした。

「……！」

そして次の瞬間、凧沙はドキリとした。シアンは凧沙の手を放そうとしない。今まで以上に強い力で握りしめている。

「ちよつと……シアンくん……？」

「……」

すると、凧沙とシアンの手の間から青白い光が漏れ始めた。凧沙はその光を見て背筋が凍りつく。この光はあの時の光と同じものだったのだ。そして、シアンという名のルビデとかかわってしまったことを、心から後悔した。

「やめて！！シアン！！」

ティバはそう叫ぶのと同時に、凧沙とシアンの手を力強く引き剥がす。

「なにすんだよー！ティバ！！」

シアンは苛立ちの混じった表情で、ティバを睨みつける。すると、ティバは困惑した瞳でシアンを見つめながら言った。

「だって！せっかく凧沙と仲直りできたのに！ひどいよ。シアン・

」

そして、ティバは悲しそうにして顔を伏せた。凧沙はそのティバの表情に心がチクリと痛む。

「ティ……」

「何言つてんだよー？この人間さんは俺達が生きるのに必要なものだろー？」

シアンは凧沙の言葉を遮るようにしてそう口走る。

「ティバだって、人間の生命力取って生きてるじゃんか！それに俺は黒い翼が生えるような“力”が欲しいんだよ」

「……」

「それにさ、ティバだってこの人間さんを騙し……」

「やめて!!」

凧沙はシアンの言葉が聞きたくないあまり、そう叫ぶ。

「もうその事はどうでもいい……私はティバと普通に話せるようになって、それだけで嬉しいんだから」

「凧沙……」

ティバは戸惑いの入り混じった表情で、凧沙を見つめている。すると、ティバの隣で不機嫌な顔で立っていたシアンが口を開いた。

「……もーいーよ。俺先に帰ってるから……ティバ、後からちゃんと来いよな」

次の瞬間、その姿は闇に溶けるようにしてかき消された。

そして暗い部屋に残されたのは、ティバと凧沙だけになった。

「凧沙、ごめんね……でもシアンは本当はいい人なんだよ……私の悩みもいつも聞いてくれて……」

「分かってるから……」

凧沙は安心感を抱きながらそう答える。正直シアンの行動には度肝を抜かれたが、決して彼は悪い人ではないだろう。それは、身にもとう優しい雰囲気と、ティバの友達ということだけで明らかだ。

そして凧沙は暗いままでも話しづらいつついたので、部屋の電気をつけた。それと同時に部屋は眩しいくらいの光に包まれる。

そして今度はティバの姿をしっかりと確認することができた。黒い髪にふわりとしたワンピース。そしてそこから覗く白い肌。久しぶりに見るティバの姿だ。

すると、ティバは苦しそうに表情を歪めた。

「ごめん……凧沙、電気消してもらえる……？なんか眩しくて」

「あ……。分かった」

凧沙はそう言うと、再び電気を消した。そして部屋は再び暗闇に包まれる。

すると、ティバはベッドに飛び乗るようにして腰をおろした。その顔にはいつもの明るい笑みが戻っている。

「凧沙の部屋久し振りだなー。前は、いつものようにここにいたのにねー」

「あはは・・・そうだね」

そして凧沙もティバの隣に腰をおろす。その時、凧沙はティバの横顔をひっそりとうかがった。

（今なら、あのことを聞いても大丈夫だよな・・・？）

「ねえ、ティバ」

「なーに？」

「・・・ティバがタ斗の家系に呪いをかけたって本当？」

その瞬間、ティバの表情が一気に凍りつくのが分かった。しかし、すぐにその顔は弱々しい笑みに染められる。

「・・・凧沙、その事知ってたんだねー・・・でも凧沙に隠し事するなんて、やっぱり嫌だから別にいいや・・・」

「・・・」

「今まで黙ってたけど、私はハーメルンの笛を受け継いだ人間たちの命を奪ってきたから、今でもここにしていることができるんだ・・・最初に言った、あの時の笛の音が忘れられないってのもあるけど・・・」

「

凧沙は悲しみに歪んだティバの横顔を見て、心が痛んだ。

「・・・ティバはコーガンド様、とずっと一緒にいたかったから、悪魔と約束をしてタ斗にとっての死神になったんだよね？」

「！」

「でも何人もの人の命を犠牲にして生きても、この世に繋ぎ止めているコーガンド様、と一緒にいつことはできない・・・そうだよね・・・？」

「-っ・・・」

次の瞬間、ティバの黒い瞳から大粒の涙があふれ出した。そしてそれと同時に、ティバの顔も今までにないような悲しみに歪む。

「っ・私、怖いのっ。コーガンド様に会うのがっ。本気で探せばきつとすぐに会える所に彼はいる。でもっ・・・コーガンド様にとつて私は、呪いをかけた人物でしかない・・・コーガンド様は前みたいに私に優しくしてくれるはずがないっ・・」

ティバは震える声で、一つ一つの言葉を噛みしめるかのようにそう言った。すると、風沙はティバを引き寄せ、優しく抱きしめた。

「・・・ティバ、ありがとう。話してくれて」

「-!!-」

「私、ずっと気になってた。ティバが私に何か隠し事してるって」
「なぎ・・・」

「でも私は、ティバがそんなに泣く必要なんてないと思う・・」

そして風沙は、ティバの体から手を放し、ティバの涙の溜まった瞳をしっかりと捉えて言った。

「コーガンド様は“優しい人”なんですよ？」

「!・・・うん・・」

「その“優しさ”をもうちよつと信じてみてもいいと私は思うんだ」
「・・・」

すると、微かにだがティバの表情が柔らかくなったような気がした。そしてティバは、風沙に向かって微笑んだ。

「・・・ありがとう・・風沙」

ティバは呟くようにそう言うと、その場に立ちあがる。そしてティバは、風沙の手を力強く握りしめた。

「私、風沙の事もっと大好きになっちゃった!!」

満面の笑みでティバはそう言った。

6 涙とありがとう？

時は少しだけ戻り……

夕斗は玄関の扉を乱暴に押し開けた。

何でこんなイライラするのだろう。きっとそれは風沙が原因だ。あいつは……きっと死神の事を大切に思ってる。普通の友達のように。だったらこれ以上仲良くなる前に……

「兄さん・何で夕希兄さんの前で、そんな顔するかなあ」

「！」

気づくと、仏壇の前に座っている夕斗のすぐ後ろに夕理が立っていた。

「夕希兄さんに心配かけるんじゃない？ほら、兄さんが中学生の時、よく喧嘩して帰って来て、いつも兄さんの話聞いてくれてたじゃん」

「……うるさいな」

夕斗はそう流すように言うと、いつものようにおりんを一回鳴らす。

そこにある写真立てには、きまって笑顔の兄貴がいる。夕斗はそれを見ると、微かに表情をほころばせた。

「てか、夕理なんで俺より先に家にいんだよ？部活は？」

「今日から期末テスト前だから休み」

「そーなんだ。んじゃ、俺上行くから」

夕斗はそう言うと、夕理の頭を軽く叩いてその場を後にした。

タ斗は自室へ入ると、鞆を机の上に置きベッドの上にドカッと腰をおろす。

「コーガンド」

「・・・」

「コーガンド!!」

すると、タ斗のすぐ目の前にコーガンドが姿を現した。帽子から覗くその顔は、タ斗を穏やかな表情で見降ろしている。

「何で最初呼んだ時に出て来てくれないんだよー」

「・・・イライラしているタ斗とあまりかわりたくありませんからね」

コーガンドは微笑みながらそう言つと、その場に足を組んで腰を下ろした。

「つてか、俺イライラしてねーし!!・・・そんで今日は、ある決心をコーガンドに伝えたいと思つてな」

「・・・なんですか？」

すると、タ斗はハーメルンの笛をポケットから取り出した。そしてそれを、コーガンドの目の前まで持つてくると、それを力強く握り締める。

「俺は明日の夜、最後の子供・・・あの死神をこの笛に封印する・・・いくら風沙が嫌がったとしてもな」

すると、コーガンドは一瞬驚いたように目を見開き、その後いつものように微笑んだ。

「・・・そうですか」

ティバはいつもの木の枝に腰を下ろすと、夜空を仰いだ。やっぱり月と星々は、あの頃と変わらずそこにありつづける。あの時の私は、泣きながらこの空を見上げることしかできなかった。

でも今では・・・何故だろう。少しだけだが笑えるような気がする。

きつとそれは風沙のお陰だ。風沙は私を受け入れてくれた。・・・死神である私を、ちゃんと認めてくれた。そして私は、自分を認めてくれる人がいるからこそ頑張る勇気がでた。

・・・コーガンド様に会いに行こう。

嫌われても、無視されてもいい。ただもう一度、「私とずっと一緒にいてください」ってお願いするんだ。そして・・・出来ることなら、彼と再びメロディーを奏でたい。彼の笛の音に合わせて、あの時のようにお気に入り入りの歌を口ずさみたい。

「・・・つよし・・・」

ティバはそう呟くと、その場から姿をかき消した。

ティバは風沙が寝ているベッドの前に姿を現した。

（やっぱり寝ちゃってるか・・・）

コーガンド様に会い行く前にもう一度風沙と話をしたと思ったが、風沙が寝ていたのでは仕様がな。

しかも今の時刻は夜の十二時過ぎ。寝ていても全然おかしくない時間だ。

（・・・また会いに来るね）

ティバは心の中でそう呟くと、その場から姿をかき消そうとした。しかし次の瞬間、体の力が抜けティバはその場に尻もちをつく。

（！！！・・・何これ・・・）

全身に力が入らず、立ち上がることができない。そして、ふと部屋の中をほのかに明るく照らしている電球に目が行った。

（もしかして・・・）

ティバの全身から嫌な汗がこみ上げた。もしかして・・・あの電球のせいなのだろうか。

今までは光の中にいることが普通だった。でも、シアンやルシウスと行動を共にするようになってから、光の中にいることが少なくなったのだ。そして、今の自分は光の中にいることがほとんどない。そして、ティバは右手に大きな鉛色の鎌を握りしめた。そしてそれを風沙に向かって振り上げた。

（ごめんね風沙・・・ちょっと生命力もらうね）

鎌を振り下ろすと、ティバの体は一気に自由になった。すぐさまティバはその場に立ちあがる。

（よかった・・・これでコーガンド様に会いに・・・）

「！！！」

ティバは自分の目を疑った。風沙の勉強机に置かれた小さな手鏡・・・そこに映ったのは今までの自分じゃない。

金色の瞳を暗闇に輝かせ、悪魔のような黒い翼をもった自分だったのだ。

「いやああああ！！！」

ティバはそう叫ぶと、再びその場にしゃがみ込む。そしてそれと同時に、黒い羽がひらひらと舞い落ちた。

「・・・ティバ・・・!？」

風沙がティバの声に驚いて目を覚ました。そしてその顔は、みるみる困惑した表情へ染められていく。

「み・・・ないで・・・なぎ・・・さ・・・」

ティバは顔を伏せると、今にも消えてしまいそうな声でそう呟いた。

「ティバ・・・その姿・・・」

風沙はそう呟くのと同時にティバに駆け寄る。しかしその瞬間、

風沙は誰かに強い力で突き飛ばされた。そして成すすべもなくベッドに倒れこむ。

「そろそろこうなる頃だと思ってたんだよ」

驚いて見ると、ティバの隣にいつも間にか背に漆黒の翼を持つ男、ルシウスが佇んでいた。すると、ルシウスはティバの腕を引っ張り、起き上がらせた。

「人の命を平気で奪うようなお前には、その姿が一番お似合いだ」

「！！何言ってるの・・・？ルシウスはこんな事一度も言ってなかったじゃない・・・！」

ティバは震える声でそう呟く。

「お前が聞かなかったただけだ」

「！！」

その時、風沙は思った。きつとこのままだとルシウスはティバを連れて行ってしまっただろう。そうしたら・・・ティバと一生会えなくなってしまうかもしれない。

「ティバ！こつち来て！！」

風沙がそう叫ぶと同時に、ティバの金色に染まってしまった瞳が大きく見開かれる。

「風沙・・・」

その瞬間、ティバの顔が苦痛に歪んだ。ルシウスがティバの腕を力強く引っ張ったのだ。

「だめだ。お前には俺と一緒にきてもらう。俺達の“本当の仲間”になっただけだから」

「・・・！！」

それと同時に、二人の姿は闇に溶け込むようにしてかき消された。そして、暗い部屋に残されたのは風沙だけになった。

（・・・どうしよう・・・！！）

風沙は焦った。全身から嫌な汗がこみ上げる。

今はとにかく・・・ティバを連れ戻すべきだ。ティバがあのままでは、きつとコーガンドに思いを伝えることさえできなくなっ

まう。

（でも・・・どうすれば・・・）

その時、凧沙の脳裏に夕斗の顔がうかんだ。しかし、それはすぐにかき消された。ティバの存在を確認しているのは、凧沙以外では五十嵐家だけだろう。しかし、五十嵐家とティバの関係は最悪だ。（特に夕斗だが）

（あ・・・）

凧沙は、雑木林での夜の事を思い出した。その時分かったのは、夕斗とコーガンドが仲がよさそう、ということだ。夕斗とどうにかして会うことができれば、コーガンドと接触できる可能性は十分にある。彼ならどうにかしてティバを救ってくれるかもしれない。

（コーガンドは“優しい人”のはずだから、きっと大丈夫だよね・・・？）

凧沙は自分にそう言い聞かせると、ベッドから立ち上がる。時計を見ると、約午前一時を指していたが、気にしないことにした。こんな時に、ゆっくり寝ていられるはずがない。

そして凧沙は、部屋の扉を開けると、なるべく音を立てないようにして階段を駆け降りた。

凧沙は懐中電灯で足元を照らしながら、夕斗の家へと急いだ。

毎朝通っている通学路も、真夜中に通るとまったく違う道のように見える。すると、懐中電灯の光が誰かの足元を照らしだした。

「！！！」

驚いて足の主を照らすと、そこには眩しそうにして顔を歪めている夕斗がいた。

「凧沙、何でお前がこんな所にいんだよ？」

「何でって・・・そっちこそ」

凧沙は光を夕斗から外すと、ポツリとそう呟く。

「俺は・・・あの死神の居場所を凧沙に聞こうと思つてな」

タ斗はそう言つと、睨みつけるようにして凧沙を見下ろした。

(う・・・)

凧沙は反射的に、タ斗から視線を外す。

「私はっ・・・コーガンド・・・さん・・・に会わせてもらいたくて」

すると、タ斗の瞳がわずかに見開かれた。

「は？なんで凧沙がコーガンドに用があんだよ？」

「それは・・・」

凧沙はそこまで言つと、口を閉ざす。

きつとタ斗に何を言つても、ティバに対しての態度は変わらない
だろう。むしろ悪くなるかもしれない。

「あー!!」

タ斗はそう声をあげると、凧沙の懐中電灯を取り上げた。

「この懐中電灯、俺んちのじゃねーか！」

「!？」

「だから俺は、ここまで懐中電灯なしで来たんだからな！」

「・・・そうなんだ」

凧沙の脳裏にこの懐中電灯を拾ったときのこと蘇る。この懐中
電灯は、美春には入っていたルシウスから凧沙を救ってくれたもの
だ。

「・・・まさか・・・ンド・・・」

「え？」

タ斗が何か呟くように言つたが、凧沙には聞きとることができな
った。

「私がどうかしましたか？タ斗」

その大人びた声と同時に、タ斗のすぐ隣に帽子を目深に被つた男
ーコーガンドが姿を現した。

「コーガンド!!」

すると、コーガンドは凧沙に向かって微笑み、帽子を外して軽く
頭を下げた。

「こんばんは、風沙さん。話はよく夕斗から伺ってますよ」
「・・・どうも」

風沙も彼の突然の登場に驚きながらも慌ててそう答える。

（じゃなくて・・・！）

「あのっ。コーガンド・・・さん、ティバ・・・」

「コーガンド！何でこんな所に出てくるんだよ。今から最後の子供を封印するんだからな！手出しは無用だぞ」

「・・・！！」

風沙は夕斗の言葉にドキリとした。・・・“ティバを封印する”
確かに夕斗はそう言った。

すると、コーガンドは帽子を被りなおし、穏やかに微笑む。

「おや・・・二人の意見が一致しましたね。二人・・・いや、私を含め三人が今会うべきなのは、“ティバ”という人間のようですね・・・」

「！！！！」

風沙はその言葉にハツとして彼を見る。しかし、彼の穏やかすぎる表情からは、何も読み取ることができなかった。

風沙は夕斗の後に続き、学校の近くにある雑木林までやって来た。コーガンドの話によると、ここにティバがいるらしい。ティバの居場所を知っているなら、会いに行つてあげてもいいのにと風沙は思ったが、あえてそれは口にしないことにした。

コーガンドにも、何かそれなりの理由があつてそうしているのだと風沙は思ったからだ。

「どこにもいねーぞ！！」

夕斗はそう言いながら、暗闇に染まった木々の間に光を当てていく。

「光、消したほうがいいんじゃない？」

風沙は呟くようにそう言った。さっき見た、ティバの姿が頭からは離れない。その姿は、きっと光を受け付けられないだろう。

「は？何言ってるんだ？光消したら、何も見えねーじゃん」

「・・・いいから」

夕斗は一瞬、その言葉に顔をしかめたが、風沙のいつもと違う真剣な表情に気づいて懐中電灯の明かりを消した。それと同時に、周りは暗闇に包まれる。そして暫くの沈黙の後、風沙は口を開いた。

「ティバ・・・いるなら出て来て」

すると、風沙のすぐ後ろから声がした。

「風沙・・・」

そちらに振り返ると、そこには金色の瞳を輝かせながら立っているティバの姿があった。

「ティバ！」

「死神！！」

風沙と夕斗は同時にそう叫んだ。そして、風沙はすぐにティバのもとに駆け寄る。

「ティバ・・・大丈夫？」

すると、ティバは弱々しく微笑んだ。

「うん・・・あのね、風沙・・・」

「風沙！！その死神から今すぐ離れる！！」

「！！！」

振り返った先にあつた夕斗の顔には、今まで見たこともないような険しい表情が浮かんでいる。

「今からそいつを封印する！！」

「待って！！」

風沙は反射的にそう叫んだ。そしてティバを隠すようにして、夕斗の前に立つ。

「・・・まだティバを封印させるわけにはいかない・・・だってティバは・・・」

風沙はそこまで言うと、顔を伏せた。だってティバは、まだコーガンドに思いを伝えてない。ここで封印されてしまったら、ティバが生きてきた意味がなくなってしまう。・・・そんなの絶対に嫌だ。「どけよ!!」

「・・・」

すると、ひんやりした手が風沙の指先に触れた。

「ありがとう・・・風沙」

ティバは弱々しく風沙の手を握り締めると、そう呟く。

「え・・・?」

「私、もういいの。コーガンド様とは会うことはできないけど、ここで封印される」

「!」

風沙は驚きのあまり言葉を失った。すると、ティバは風沙の手からそつと自分の手を外し微笑んだ。

「だってこんな姿、コーガンド様に見られたくないもん・・・」

「・・・」

風沙は沈黙を守ったまま、ティバを見下ろした。風沙を見上げているその顔は、悲しみしか浮かんでないように感じた。

風沙は悔しくなった。これじゃ、ティバは幸せではない・・・決して。

「・・・それなら遠慮なくいくぞ」

「やめるよ!!」

その声と同時に、ティバと風沙の前に金色の瞳をもつ少年――シアンが姿を現した。シアンは刺すような瞳でタ斗を睨みつける。

しかし、タ斗はシアンには目もくれず、自分の口元に笛を近づけた。

その時風沙はハッとした。きっとタ斗にはルビデ族であるシアンが見えてないのだ。

「ティバを封印するなんて絶対に許さないからな!せっかくティバとどっちが先に翼が生えるか競争してたのにつ・・・ティバが先に

生えた途端、ティバが居なくなっちゃ・・・俺、どうしたらいいんだよ・・・！」

「シアン・・・」

風沙の隣でティバはそう呟く。

「私・・・もういいの。自分勝手ってことは分かってるけど・・・」

「俺はよくないっ・・・それにティバも本当は全然よくないんだろ！？」

その瞬間、ティバとシアンの背後に大柄な男が音もなく姿を現した。

「！」

しかし、その姿は何かに突き飛ばされるようにして、その場から消えた。

（え・・・？）

「あなたはあの時、きちんと始末しておくべきでしたね」

風沙は驚いてそちらに目を向ける。その瞬間、コーガンドがルシウスの首を掴み、木の幹に押さえつけている姿が即座に目に飛び込んできた。

「タ斗が、あなたに受けた、呪いを解こうとしているのです。邪魔をさせるわけにはいきません」

コーガンドは低くそう呟くと、ルシウスの首をさらに強く押さえつけた。

「くっ・・・笛使い、まさかこんな所に姿を現すとはな・・・」

ルシウスはコーガンドの力に逆らえないまま、顔を苦しみに歪めそう言った。

「タ斗、この前私が教えた曲をお願いします」

「・・・！・・・おう。あの曲だな」

タ斗はコーガンドの突然の行動にも冷静さを失わず、笛の穴に指をかけた。それと同時に、美しい笛の音色が周りを包み込む。

「くっ・・・」

ルシウスは低くそう呟ると、その場から姿をかき消した。

そしてシアンもその曲を聴いた途端、ビクツと体を震わせその場から姿を消す。

コーガンドは木の幹から手を離すと、こちらに振り返り、微笑んだ。

「ティバさん、その姿が一番似合ってますよ」

「！！」

風沙はコーガンドの言葉にドキリとして、ティバに視線をうした。そして、驚きのあまり息をのむ。

そこにいるティバは、風沙の知っているティバではない。綺麗な赤毛に、薄いグレーの瞳。風沙が何度か夢で見た、女の子の姿になっていたのだ。

タ斗も驚いて、その指の動きを止めた。そして信じられないものを見るような目つきで、ティバを見下ろした。

「なっ・・・コーガンド、どういう事だよ！？」

すると、コーガンドはこちらに歩み寄り、ティバの隣に腰をおろした。そして、ティバの肩に腕を回すと言った。

「・・・ティバさんは決して、“死神”ではありません。ハーメルンの町に住んでいる普通の女の子・・・私の大切な“出会い”の一人なんですよ」

すると、ティバは信じられないような目でコーガンドを見つめた。

「・・・コーガンド様・・・」

すると、コーガンドはいつものようにその顔に優しい微笑みを浮かべる。

「今タ斗に吹いてもらったのは、昔私がルビデを封印する時に吹いていた曲です・・・今ではもうほとんど使われなくなってしまいましたが・・・その曲にはまだルビデを封印する力が残っていたようですね」

次の瞬間、ティバの瞳から涙が溢れ出した。

「-っ・・・ごめんなさいっ・・・私、コーガンド様をたくさん・・・傷つけた・・・」

ティバはとぎれとぎれに、そう呟く。すると、コーガンドはティバの肩から腕を外し、その場に立ちあがった。

「・・・そうですね。ティバさんが私の“最後の願い”も聞いてくれなかった事を残念に思います」

「!・・・!」

そしてコーガンドは柔らかに微笑んだ。

「でも今は、“ごめんさない”より“ありがとう”と言うべきだと私は思いますよ・・・ティバさんが今まで笑う事ができたのは、私以外の誰かのお陰だと思いますから」

するとティバは驚いたように目を見開き、その後満面の笑みで微笑んだ。

「はい・・・!」

ティバはそう言うのと同時に、コーガンドに背を向け、風沙に勢いよく抱きついた。

「!!ティバ・・・」

「ありがとう・・・風沙。私はアニタやレイタ、シアン、そして・・・風沙にとっても感謝してる・・・本当にありがとう。私のそばにいてくれて・・・私は風沙のお陰で頑張る勇気が出たの」

そして、風沙もティバをそっと抱きしめた。

「ティバ、よかったね・・・」

すると、ティバはさらに強く風沙の体を抱きしめた。

「うん・・・!」

その時、今までの状況を茫然と見守っていた夕斗が口を開いた。

「コーガンド・・・これで俺達にかかった呪いは解けた・・・わけじゃないよな？」

すると、コーガンドはにつこりと口元に笑みを浮かべる。

「いや、まだですね。最後の子供であるティバさんを封印しなければ、呪いは解けません」

すると、夕斗は顔をしかめた。

「なんでそんなに楽しそうなんだよ!？」

すると、コーガンドは夕斗からそつと笛を取り上げた。

「この封印の曲は私に吹かせてください」

「なっ……！」

そして夕斗が何かを言う間もなく、コーガンドの笛からメロディ
ーが流れだす。

その曲を聴いて風沙はハツとした。

自分はこの曲を知っている……この曲は夕焼けに染まっ
た街並みを背景に、コーガンドとティバが奏でていたものだ。

ティバはその曲に気づくと、風沙から離れ、嬉しそうに微笑んだ。
そしてそのメロディーに合わせて歌を口ずさむ。

♪
私の孤独な微笑みを

誰が気づいてくれるだろう

涙に濡れることもなく

闇に染まることも決していない

もし気づいてくれるなら

貴方の為に泣きましよう

その歌が終わりを告げる頃、ティバが青白い光に包まれた。

「ティバ……」

しかし、ティバは風沙の不安な顔とは対照的に優しく微笑んだ。

そして風沙の手をギュッと切り締める。

「いいの、風沙。私、嬉しいよ？ やつとコーガンド様が呪いから解
放されるんだから……それに私のお気に入り曲がコーガンド様
を救うなんてもっと嬉しい」

「……………」

「風沙、ありがとう。大好きだよ」

その瞬間、ティバの体は全身眩しいほどの光に包まれ、そして風沙の手は空をつかむ。

そして風沙の前からティバの姿は完全に消え失せた。すると、今度はコーガンドの体が青白く輝く。

「さて・・・私の長かった人生もやっと終わりのようですね・・・」すると、コーガンドが持っていた笛から次々と青い光の玉が溢れだした。そしてそれと同時にコーガンドの体が空中にふわりと浮きあがる。

そしてコーガンドのそばに浮かんでいた光の玉の一つが輝いたかと思うと、それはティバの姿になった。

「ティバ！」

風沙はティバの姿を見るなり、そう叫ぶ。そしてティバは風沙に微笑みかけると、その口を開いた。

「コーガンド様・・・これからも私とずっと一緒にいてくれますか？」

「そうですね・・・私の宿命も無事、タ斗達のお陰で終わりましたし、“大切な人”とずっと一緒にいることもいいかもしれません」

ティバはその言葉を聞くと、何も言わずに、ただ本当に嬉しそうに微笑んだ。

そして風沙はそのティバの顔を見て、心の底から安心した。

ティバ・・・やっと・・・幸せになれたんだね。

するとティバとコーガンドをまもっていた青白い光がさらに強くなった。

「ティバー!!」

「コーガンドー!!」

風沙とタ斗は同時にそう叫ぶ。

「風沙、またね。私、風沙と出会えて本当によかった」

「タ斗、お世話になりましたね。これからはイライラして、風沙さんに当たらないようにして下さいね」

そして次の瞬間、風沙の瞳から涙が溢れ出した。

（ティバ・・私もティバと出会えて本当に良かった）

次の瞬間には、二人は綺麗な光の玉に変わり、周りに浮かんでいた光の玉と共に夜空高く上り消えていった。

そして、寂しすぎるほどの静けさと暗闇が、凧沙と夕斗を包み込んだ。

あの日の夜以来、ティバは決して凧沙の前に姿を現すことはなくなった。

そしてその数日後の夜、凧沙の前に現れたシアンは、寂しそうな笑みを浮かべ「ティバが幸せなそれでいいんだ。だから人間さんもあまり悲しむなよ」、そう言った。

凧沙はシアンという言葉が嬉しかった。ティバにこんないい友達がい たなんて、安心した。ティバが笑っていたのは、きっと彼のお陰でもあるのだろう。

そしてそれ以来、ルビデという生き物の気配も消えた。

ふふふ

初夏の日差しは、もうすっかり真夏の日差しに変わり、風沙をサンサンと照らし出す。そして登校中、知らず知らずのうちに風沙はある歌を口ずさんでいた。

「またその歌うたってんのか？」

後ろから歩いてきた夕斗が、風沙の歩調に追いつくと、肩を並べ歩きながら言う。

「・・・私のお気に入りの曲だから」

風沙は呟くようにそう言った。

「あゝ。俺もまた呪いの笛、が吹きてーな！」

夕斗はそう言うのと、背伸びをする。夕斗の話によると、ハーメルンの笛はコーガンドと一緒に消えてしまったらしい。

でも風沙はそれでいいと思った。だってそうしないと、ティバがコーガンドの笛の音に合わせて、歌を歌えなくなってしまうだろうから。

「・・・でもちゃんと覚えてる」

風沙はポツリとそう呟く。

「は？」

そう、あの笛の音は今でも風沙の心に流れている。

そして風沙は、その音色に合わせて静かに歌を口ずさんだ。

end .

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9673p/>

笛の音に誘われて

2011年2月1日14時55分発行